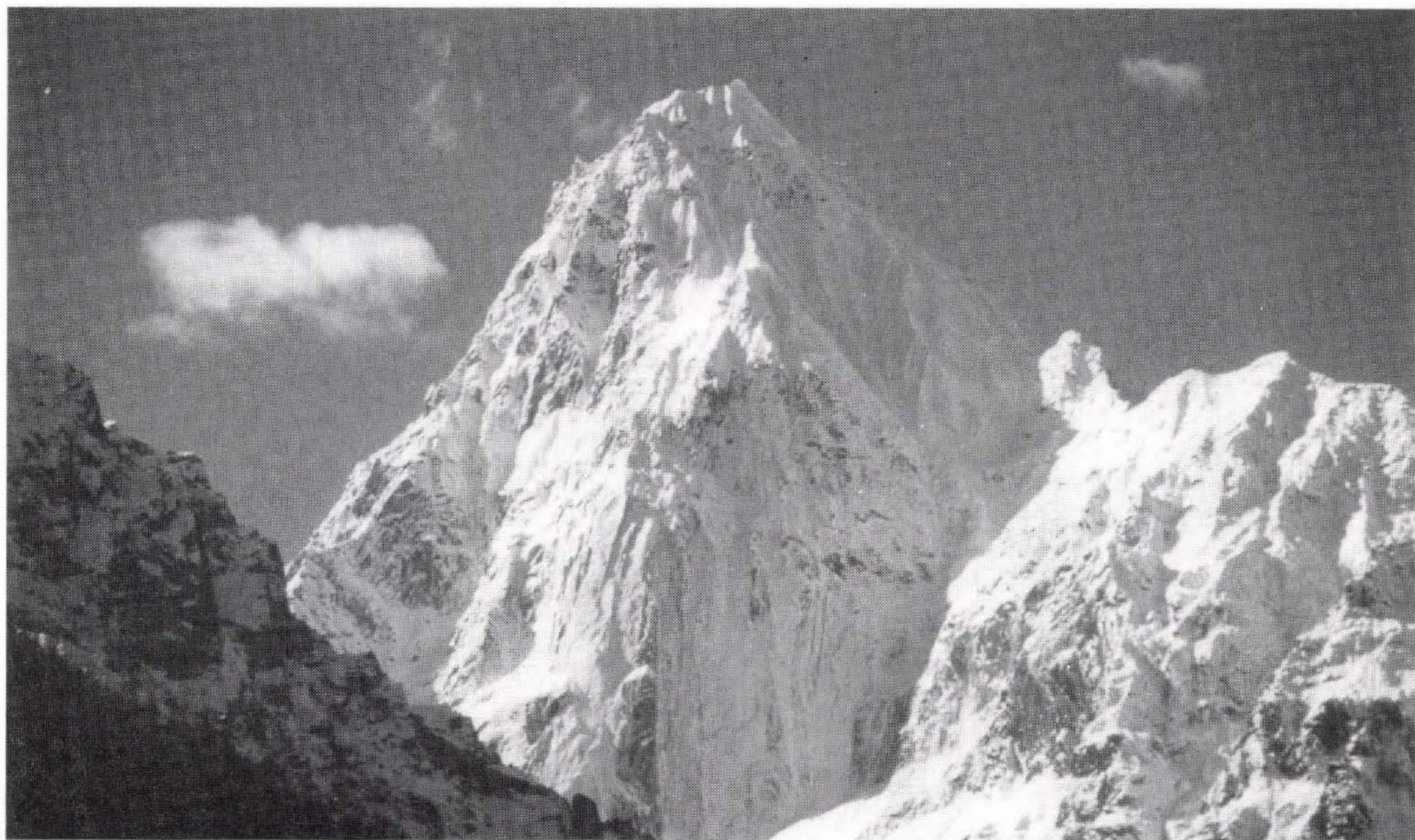


針葉樹会報

第 106 号
2006 年 3 月



目 次

禁断の東チベット・易貢藏布 ——未踏の山と谷を踏査する	2005年10月
山スキー初詣	中村保
北海道五十名山（無雪期）	加地幸雄
槍ヶ岳 北鎌尾根	小野肇
「シングルトラック」	藤原朋信
鳥取での山登りライフ（上）	引地真
追悼／春日井実氏	田形祐樹
三月会通信	石和田四郎
2005年夏・雲の平の記録	佐薙恭
…春日井との最後の山行	
晚夏の雲の平	
編集後記	
表紙写真＝イゴンツアンボーの南側に聳えるタパシリ（5648m）。	
中村保氏が世界で初めてカメラに収めた	

表紙写真＝イゴンツアンボーの南側に聳えるタパシリ（5648m）。
中村保氏が世界で初めてカメラに収めた

発行日 2006 年 3 月 10 日

発行者 針葉樹会

印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報

第 106 号

編集人 有賀 盈

〒150-0012

渋谷区広尾 3-9-22

会報幹事／有賀 盈、井草長雄
川名真理、大谷公重

禁断の東チベット・易貢藏布

—未踏の山と谷を踏査する

2005年10～11月

中村 保（昭33年卒）

2005年秋、宿願の易貢藏布踏査行が三回目のチャレンジでようやく実現した。パトナーはいつもと同じ永井剛さん。ラサのガイド、タシが同行する。易貢藏布の知られざる未踏の山々と氷河は素晴らしいが、それにも増して魅力的なのが川の美しさである。急流と滯が断続的に続く清流は信じられないほど美しい。私の知る限り東チベットで最も美しい。

チベット高原の東端でヤルン・ツアンポーが大屈曲点で世界最大の峡谷となり、ヒマラヤ山脈東端のナムチャバルワ峰（7782m）を抱え込むようにして流を南に変える。その北側と東側に東チベットの念青唐古拉山脈東部と崗日嘎布山群^{カシリーガーポ}および横断山脈と呼ばれる広大な山域がある。「チベットのアルプス」と

表現するに相応しい氷河を抱く壯麗な冰雪の峰や天を突く鋭峰が連なっている。

易貢藏布はヤルン・ツアンポーの大屈曲部から北に向かう支流ポ・ツアンポーが通麦付近で東西に二つに別れ、東が怕隆藏布^{バロンツアンポ}、西が易貢藏布となる。易貢藏布は念青唐古拉山東部を東南東に流れる水源から怕隆藏布との合流点まで直線距離で230kmの峡谷である。

川の全長は直線距離の一・五倍ぐらいあるだろう。源流から中央部の尼屋^{ニーウ}（直線距離で125km）までを上流部と呼ぶ。尼屋から怕隆藏布との合流点（直線距離で105km）までを、下流部と呼ぶ。下流部の北側は全長35kmの哈青氷河^{チアチ}など東チベット最大の氷河が発達し、その源頭には無数の6000mを超える未踏峰が連なる。下流部の南側にも、氷雪の険しい銳峰が居並ぶ。西北西から易貢藏布が流れ込む易貢措^{イゴンコ}は南東の方向に長さは約12km、河床の幅は2km近くある。易貢措の周囲は開けた平地で農業が営まれている。

易貢措の発見者は英國の探検家F・M・ベイリーと測量の専門家H・T・モースヘッドである。1913年、ヤルン・ツアンポー探査の途上、怕隆藏布を下り易貢藏布の左岸を行き、7月3日に易貢措の東端で右岸に渡り、通麦に戻りポ・ツアンポーを下った。その時

12年前の1901年に起こった左岸支流トウラルンからの土石流による易貢措の生成と、すぐ後の大洪水について村人から詳しく聞いている。2000年の雨季の初めにも大洪水が発生した。易貢藏布の傷跡は両岸の随





所に見られる。橋は流され川蔵公路は数ヶ月不通になった。

下流部を辿った外国人はキングドン－ウォードが最初である、我われは70年の歳月を経て、禁断の峡谷の易貢措から下流部を遡った二番目の外国人である。紀行『Assam Adventure』(London 1942) の中で「易貢藏布のゴルジュはヤルン・ツアンボーのゴルジュより印象的であつた。何故なら、これほど荒々しい景観を想像していなかつたからである」とキングドン－ウォードは記している。

10月27日、いよいよ禁断の易貢藏布に入れる時がきた。ラサとその周辺は3日間快晴が続いていたのに、易貢藏布では、もう8日も雨が続いているという。チベット高原と東チベットの峡谷部の気象の違いをあらためて実感する。難所の土砂崩れ地点もかろうじて通過し、夕刻に易貢措の北側の易貢郷（郷は県と村の間の行政単位）の中心地、根扎村（2260m）に着く。郷の衛生院（病院）に泊まる。食堂に村長を招いて情報収集を行い、馬の手配を依頼する。村長によると、今までに易貢措から奥に入った外国人は、1992年に遭難機の搜索にきたアメリカ人だけだといふ。

10月28日、降り続いた雨が上がり青空が現れる。想像もしなかつた華麗に氷雪をまとつた尖峰の北面が易貢措の南岸に天を突いて聳える。土地の人は打巴西里（5648m）と呼ぶ。西側に「七姑娘」（チーグーニヤン）と呼ばれる岩稜が連なる5782mの美しい雪峰（ボモブニユ）がある。

易貢措の北から東にかけて信仰の山、アヤゲモ6388mが中央に聳え、その東南に6322m、6198mの鋭峰が連なる。

易貢措の西の端に近いところから易貢藏布の大きな支流が北に延び、7kmほど先の巴玉（2320m）で東西に分流する。東の谷が本流である。この谷の北側から東の奥に哈青氷河をはじめ多くの氷河が発達している。西の谷は全長14kmの道格氷河に至る。

10月29日から31日まで、北側の道格氷河の偵察に行く。馬6頭、馬方5人のキャラバンである。サルオガセが纏わりつく柵、針葉樹、棘のあるブッシュが混成する湿つた樹林帯を進む。日差しが届かず薄暗い。亜熱帯雨林のようだ。ここがチベットとは想像もつかない。棘のある蔓が身体にまつわりつき2回落馬する。いつしか雨になる。さしたる成果なく易貢措へ戻る。

の遡行に出発。馬7頭、馬方6人のキャラバン編成。念願の禁断の地に入ると思うと気持ちが高揚する。易貢措の西端の村を過ぎるとゴルジュ帯になる。キングドンーウオードが驚嘆した峡谷である。両岸は樹木の茂った数百メートルの岩壁の下を急流が蛇行する。首が痛くなるくらい見上げないと空は見えない。道は左岸を高巻きし、斜面を削り、岩を穿つてつくられているが、幅は広い。キングドンーウオードの時代、馬は通れなかつた。危険な箇所は少なくない。この6年の間に20頭の馬が川に落ちて死んだと聞く。

易貢藏布の流れは、言葉で表現できないほど美しい。時に青白の急流となり、また白く泡立つ激流となり轟音をたてて下る。やがて緩やかな流れになる滯となる。吸い込まれるような青い清流である。岸辺の松柏とのコントラストが鮮やかである。夕刻、塔魯（タール）（2575m）の村に着く。塔魯の北西には全長21kmの江普氷河と6692mを最高とするいくつかのまつたく知られていない6000m峰があるが、今回は探査できないのが心残りである。翌日も雨が降り続ける。塔魯から道は極端な泥道になる。湿った亜熱帶雨林のような樹林帯を進む。5時にキャンプする。標高2640m。

11月4日、晴、夜半は満点の星空だった。

朝暗いうちにテントをでて裏手を登り、タシランラン6170m北東面のモルゲンロートを撮る。美しく幻想的だ。明け方になると霧が谷に立ちこめ、8時半ごろから晴れ上がる。暗い樹林帯を抜け開けた冬竹の村にすると正面の谷の奥にロシア地図の5891m峰北面が姿をみせる。巨大な冰雪の塊のようだ。

午後4時半に八蓋郷の行政の中心、八蓋村（2840m）に着く。郷政府の建物の一室を借りて泊まる。八蓋村とその周辺は開けている。奥に大きな氷河と幾つかの6000m峰を頂く谷が合流する右岸の段丘に広い耕作地があり、農家が点在している。村人は愛想がいい。ここでも外国人は来ていないことを確認する。

ガイドのタシは馬方たちに手を焼いている。粗野で野卑、欲張りでサボリたがる。今までの馬方と比べると最悪である。

一番の関心は易貢藏布下流部と上流部の中間地点、尼屋（忠玉郷）までのルートである。八蓋村と尼屋との村人の往来はあり4日かかるという。ただし、馬で行けるのは1日半ぐらいで、後は悪路で馬は通れないで歩かねばならない。キングドンーウオードの紀行でも、尼屋の少し下流のゴルジュ帯は危険な高巻きを強いられたり、道に迷つたりして、行程中



イゴンツアンポーに沿ってキャラバンは進んだ

で一番難渋している。今回は八蓋から引き返す。

11月6日、晴、後ろ髪を引かれる思いで帰路につく。易貢藏布に対する欧米の関心は強い。2005年12月に英国アルパインクラブ2005シンポジウム（テーマ「ヒマラヤの東」）で150枚のスライドを使って基調講演

をしたが、そのとき易貢措の山が特に興味を引いた。ミック・ファウラーは打巴西里の圧倒的な冰雪の北壁に目を輝かせていた。登山家以上に易貢藏布を注目しているのが川下りのプロたちである。いまだ易貢藏布下流部を下った冒険家はない。



イゴンツォの湖畔から北東方面の峰々を望む

山スキー初詣

加地 幸雄（昭33年卒）

山行は四季各々佳い。其れ其れの季節の最も佳いし、変り目も亦佳い。今年は一月から十二月初旬の現在まで、通算山行五十回余、日数は六十有余で四季の山々を味わつてきた。その甘美の一つは、十二月四日の冬山初詣。つい数日前の雪解け泥道は消え、一面白銀の新世界。冬山、今日は、今シーズンもどうぞ宜しく。

頭が忘れかけていた山スキーの感覚は、体が覚えていた。膝を心持ち曲げて脚腰に弾みを入れた、なだらかな滑走、傾斜が緩んで止りそうな時、膝をもう少し深く曲げて、両ポールで同時に漕ぎ進む体勢、breakable crustに操りを取られ、失われそうな均衡を腰の力で回復せんとの緊張感、後脚で蹴り押し前脚で滑る時、腕振りを合わせる調子、深い綿雪に沈み先端だけ顔を出している前スキーに、重みをかけると徐々に沈み行く感覺、登りにかかり後滑りしそうな、登り革無しの後スキー

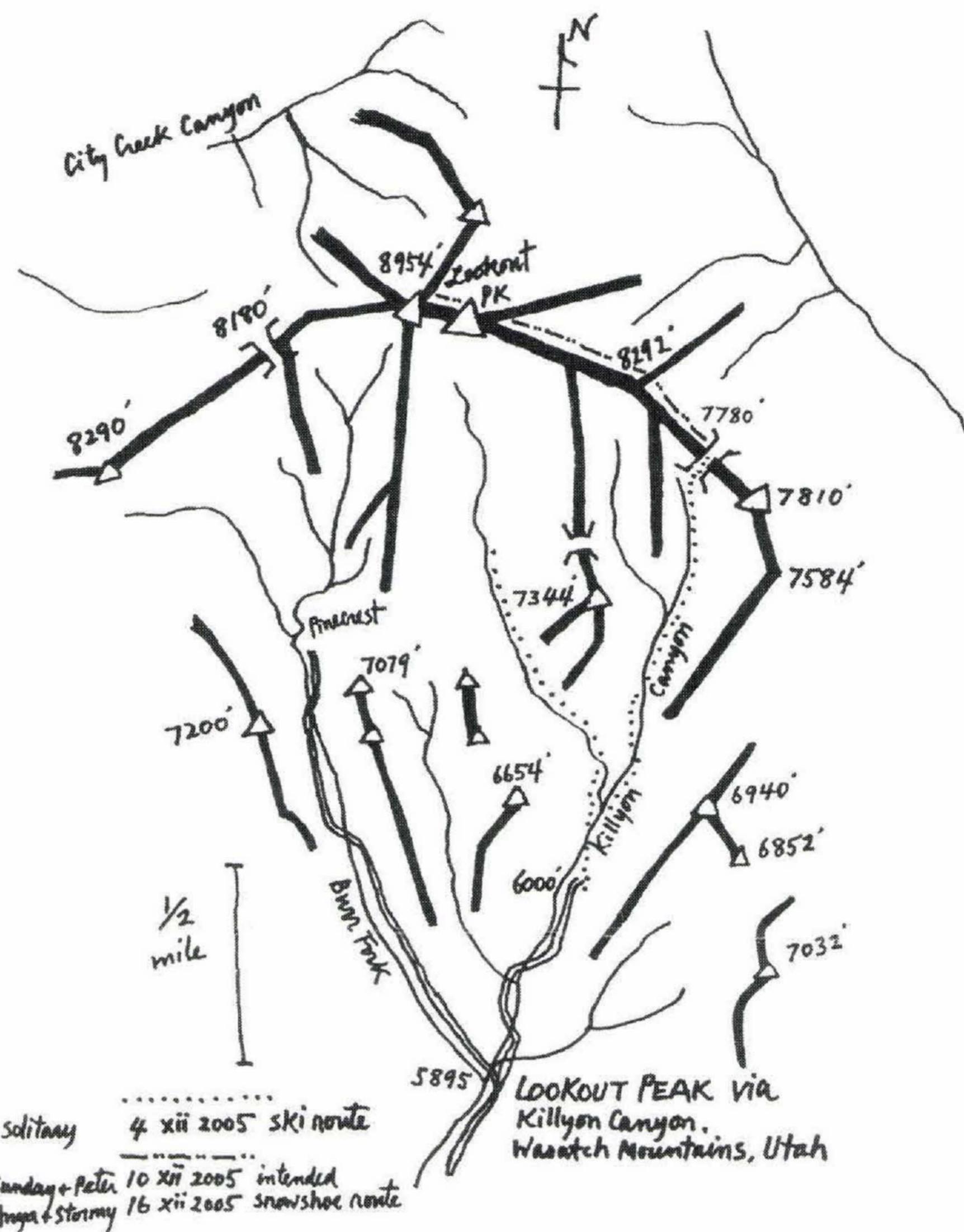
を渾身の力で抑えつつ、一尺程出した前スキーに体重を移し行く動作などなど、七、八ヶ月御無沙汰していた山スキーの諸体感を体は確と覚えてくれている。

「昔取った杵柄」とはまさに至言だ。これは頭のする懐古と云うより、むしろ今杵柄を手にする実感が、往時手にした体感の腱筋細胞に内在する記憶を、即時に蘇らせたことを言うのだろう。孔子は「有朋自遠方來不亦樂乎（同志の旧友が遠くからやつて来る、ほんとに楽しいなあ）」と述懐した。親しみの過去と現在との繋がりが、再会の悦びの内にある。山スキー初詣で体の覚えと現在の体感が、旧友との再会のように結び付く。その結び付きを知り、楽しみ、祝う頭も、体と一つになる。山スキー初詣の三昧境だ。

初詣の神域はキリヨン谷。山門は家から丁度十マイル、車で二十分と好都合だ。私在住の塩湖城ソルトレイクシティの東側を南北に走るウオサチ連山は、西流する谷川に各所で刻まれ、当地でキヤニオンと称する渓谷を形成している。その一つがエミグレイション・キャニオン。米国中西部で迫害を受け、西部に信教自由の別天地を求めたモルモン教の一隊が、一八四七年にこの渓谷を下り塩湖谷に至つて定着したので、この名がある。

キリヨン谷はその移住谷に北から入る支流

だ。流域は北に座す遠見岳 (Lookout Peak) の南斜面(地図参照)。ウオサチ連山の最高峰は一万二千呎^{フィート}に近いので、8954呎の遠見岳は将棋なら銀将格に過ぎぬが、近辺の歩の間では幅を利かせている。初夏に国道80号線を東から塩湖城に向つて車を走らせると、塩湖谷に下る長い急坂にさしかかる頃、右側の車窓に東西に長い冠雪の山が現れる。この遠



見岳だ。例の移住民達が展望の利くこの山に、前途を決めるために探索隊を送り、この名が付いた可能性も考えられる。しかしこの山は、当地の登山や山スキー案内書には顔を出していない。

私はまだユタ州に新米の一九七〇年代前半に、近辺の山々を単独で探索していた頃、この遠見岳に踏み跡を伝つてスキー行も含め失礼ながら引用させていただく。

頂上を踏むには遙かに及ばなかつたが、下調べも一応果たし、気が緩んだのであろう。上りは無事の川越え地点で下りに転てしまつた。その有事の友達への報告を、英文のまま

二、三回登つたが、いずれもキリヨン谷の西俣のBurr Forkから8180呎の峠に出、西尾根を辿つた経路だつた。此の方 Burr Fork の車道に家が立ち並び禁駐札も林立するに至り、遠見岳は念頭を離れていた。東俣のキリヨン谷は未知未踏であつたが、新しい山友達のスーザンについ先月紹介していただいた。当時は雪解けの泥歩きだつたが、東俣・東尾根から遠見岳スキー登山を企てる動機となつた。登山同行は友達の日曜さん (Sunday) と石君 (Peter)。十二月十日に決めた。だが経路が定かでなく、友達を連れ行くには予め下調べをと、今回十二月四日の単独スキー行に至つた次第。

当日は吹雪の中、先ず6654呎と7344呎の間の沢をつめた。前途、視野は限られたが、頂上からの南斜面は侮り難い峻険、雪崩の危険も伴うと判断して引き返し、東俣を7780呎の峠まで行き、頂上からの東尾根も見通せなかつたが登頂経路として可と察し、帰途についた。

Last Sunday I went on my first ski outing of the season up Killyon Fork off Emigration Canyon, the fork in which I had hiked but not skied before. One to two feet of fresh powdery snow on the ground, the wind-chill below 10*, cold enough to have my bottles of cider frozen solid, snow flurries from dark, galloping clouds...in short, the condition was ideal, though the trail had some knarly spots. One of them was a stream crossing. There, on my way back, my skis slipped off the two icy, snow-covered logs across the stream, and I fell. Those logs were as thin as my calves, inches apart, about 10' long. So, picture me with my ski tips in the stream, ski tails caught on the edge of one log, my bottom barely on the log's edge. I could have held on to the logs, got my ski tails off them, stepped into the stream and walked out, as the top of the logs was no more than one foot and a half above the waters, and the waters themselves looked shallow. Thus with my feet wet and half frost-bitten, I could have skied down to the trailhead a mile away. I pictured this scenario before my mind's eye and rejected that option instantly. Then I proceeded to lay back to counterbalance my legs and skis lest I should slip off, planted the poles in the stream, one upstream, the other down, to get enough leverage to turn so that my bottom and pack were now squarely on the logs. So far so good, I was no longer in danger of having my bottom sliding into the icy stream. But supine on

the logs, I was in no position to wiggle toward inch by inch to the yonder, bushy, snowy shore. I still had to pick myself up like an anthropus erectus** that I happen to be, for which I needed leverage and good footing. Alas, I could get neither! Seeing that I was now safe and secure, you could have taken a picture of me floundering to get up, like a tortoise turned upside down, struggling in vain to right itself. It would have been as hilarious a shot as any in America's Funniest Home Videos. Then and only then, for rescue, you could have reached out for me with your ski pole. But there was no one about, and there is no picture to show the figure I was cutting then and there at the stream-crossing in Killyon Fork. Anyway, from that most awkward of positions how I managed to right myself up, I cannot tell. Perhaps I was in panic, perhaps I was lost in my desperate struggle. All I can tell is that moments later I found myself up, with the sensation of utmost muscular exertion lingering all over. Phew! A few gingerly sidesteps, skis perpendicular to the logs, and I was on the snow over terra firma! A while later, I was back at the trailhead, congratulating myself on my good luck, on having no part of my dear body frost-bitten. All in all, it was an exhilarating first ski outing of the season, despite the incident at the stream-crossing.

* 摂氏零下 12 度以下

** 直立人類

北海道五十名山（無雪期）

小野 肇（昭40年卒）

北海道の山は日本百名山で九山、深田クラブの二百名山で九山、日本山岳会選定の三百名山で七山紹介されている（私はそのうち二山登っていない）。これ以外に私の登った山のうち二七山を選んで五十名山とし難易度を順にABCとし紹介してみたい。（カッコ内の数字は標高、上り、下りの時間）

旭岳は北海道で一番高い山であるが、気軽に頂上を踏める。旭岳温泉からロープウェイで姿見の池まで、そこから急斜面をひとのぼり（下りにガスの時はベンキのついた岩を目に忠実におりること）。頂上から間宮岳経由で中岳分岐から中岳温泉をとおり裾合平から姿見の池まで戻るのも楽しいコース。旭岳から黒岳の縦走もお勧め。北鎮岳（2番目に高い）経由がよい。黒岳からは七合目まで1時間、層雲峠温泉につく。層雲峠をベースになるとコマクサがきれいな赤岳、赤岳から白雲

岳・緑岳と足をのばし高原温泉におりる。高原温泉から緑岳・白雲岳に登りもどつてくるのもよい。温泉は旭岳温泉湧駒荘（電話0166-97-2101）、ノムクヤ荘（0166-97-2231）、層雲峠温泉・層雲閣グランドホテル（0165-85-3111）、高原温泉・大雪高原山荘（0165-85-3818）

十勝岳は十勝連峰の最高峰、白金温泉の先の望岳台から日帰り、隣の美瑛岳に足をのばすには2時間の稜線歩きをしなければならない。天気がいいと縦走も良いが別々にのんびり登るのもよい。更にベースを十勝岳温泉に移すと富良野岳。若い頃は富良野岳から十勝岳、美瑛岳と足をのばし、オベタテシケ山さらにはトムラウシまで縦走し大雪山旭岳まで足をのばす計画に夢をふくらました時もあつた。現役には日高の縦走とあわせてお勧めしたいコースである。白金温泉自炊専用の白樺荘（0166-94-3344）、吹上温泉自炊専用の白銀荘（0167-45-4126）、十勝岳温泉稜雲閣（北海道で最も標高の高い温泉宿）、バーデンかみふらの（0167-45-2225）

雌阿寒岳は活火山である。オンネトーから登る。阿寒富士へは途中の分岐から往復1時間、そして雌阿寒岳を登り野中温泉に泊まり翌日阿寒湖畔に出て雄阿寒岳を登るとよい。

野中温泉（0156-29-7321）阿寒湖温泉阿寒

観光ホテル（0154-67-2611）

羅臼岳は世界遺産知床連峰の盟主である。

岩尾別温泉にとまって木下小屋が登山口、羅臼平から頂上までは見た目よりきつい。元気のある人は硫黄山まで縦走できるが、天候と荷物の重さ次第である。硫黄山へはウトロ温泉に泊まってカムイワツカの滝の先の登山口からの往復がお勧め。頂上直下はガスついたら要注意。岩尾別温泉・ホテル地の涯（0152-24-2331）。ウトロ温泉・夕陽のあたる家（0152-24-2764）、海に沈む夕陽はみもの。

斜里岳は登山口に山小屋清岳荘がある。登りは沢コース、下りは尾根コースがお勧め。稜線は風が強いケースがあるが眺望は抜群、摩周湖とオホーツク海、知床連山が見える。ウナベツ温泉・ウナベツ自然休養村（0152-28-2203）、清里温泉・緑青荘（0152-25-2281）、小清水温泉・ふれあいセンター（0152-62-3020）。

羊蹄山は三つの登山コースがあるが眞狩口（マツカリ）がよい。登山口に宿泊施設があるが頂上直下の避難小屋に泊まって日の出を見るのもよい。温泉が沢山あるので泊まってニセコの山に足が延ばせる。ニセコ温泉・チセハウス（0136-58-3063）、五色温泉（0136-58-2707）、新見温泉新見本館（0136-57-5231）、くわちやん温泉・ホテルようてい（0136-22-1164）、昆

北海道五十名山（無雪期）

I 日本百名山

登り 下り

1. 旭岳 C (2290m, 2 時間, 1.5 時間)
2. 十勝岳 B (2077m, 3.5 時間, 2.5 時間)
3. 雌阿寒岳 C (1499m, 3 時間 <阿寒富士も登る>, 1 時間)
4. 羅臼岳 B (1660m, 3.5 時間, 2.5 時間)
5. 斜里岳 B (1545m, 3 時間, 2 時間)
6. 羊蹄山 B (1898m, 5 時間, 4.5 時間)
7. 利尻岳 A (1721m, 4.5 時間, 3 時間)
8. トムラウシ山 A (2141m, 6 時間, 5 時間)
9. 幌尻岳 A (トッタベツ岳も登る) (2052m, 10 時間 <トッタベツ岳まで>, 6 時間)

関連する山（私の選んだ、序でに足がのばせる山）

- 1-24 赤岳 C (2078m, 3 時間, 2 時間)
- 1-25 黒岳 C (1984m, 1.5 時間, 1 時間)
- 1-26 緑岳 C (2020m, 3 時間, 2 時間)
- 1-27 白雲岳 B (2230m, 5 時間, 4 時間)
大雪山系の4色の山とも言われて
いる。
- 1-28 北鎮岳 B (2244m, 5.5 時間, 4.5 時間)
……愛山渓からの往復)
- 2-29 富良野岳 B (1912m, 3.5 時間, 2 時間)
- 2-30 美瑛岳 B (2052m, 5 時間, 3 時間)
- 3-31 阿寒富士 C (1476m, 雌阿寒岳参照)
- 3-32 雄阿寒岳 C (1370m, 3.5 時間, 2 時間)
- 4-33 硫黄山 A (1562m, 4.5 時間, 3 時間)
- 7-34 礼文岳 C (490m, 2 時間, 1 時間)
- 9-35 トッタベツ岳 A (1959m, 幌尻岳参照)

II 深田クラブ二百名山

10. 尊前山 C (風不死岳も登る) (1041m, 3.5 時間 <尊前山経由風不死まで>, 2 時間)
11. 天塩岳 B (1558m, 4 時間, 2.5 時間)
12. 暑寒別岳 B (1491m, 4.5 時間, 3 時間)
13. 芦別岳 B (1726m, 4 時間, 3 時間)
14. 夕張岳 B (1668m, 4.5+X 時間, 3+X 時間 Xは林道崩落の為 9 km の歩行時間)
15. 石狩岳 A (1966m, 5 時間, 3.5 時間)
16. ニペソツ岳 A (2013m, 5 時間, 3.5 時間)
17. カムイエクウチカウシ山 A (1979m, 8 の沢出合から 6 時間, 4 時間) (8 の沢

出合までは往復 4.5 時間)

駒ヶ岳 (1131m) 登山禁止

関連する山

- 10-36 風不死岳 C (1103m, 尊前山参照)
- 15-37 ユニ石狩岳 C (1756m, 3 時間, 2 時間)
- 16-38 ウペペサンケ山 B (1848m, 3.5 時間, 2.5 時間)

III 日本山岳会選定三百名山

- 18 ニセコアンヌプリ C (1308m, 1.5 時間, 1 時間)
- 19 余市岳 C (1488m, 3 時間, 2 時間)
- 20 ニセイカウシュッペ山 C (1879m, 2.5 時間, 2 時間)
- 21 狩場山 C (1520m, 2.5 時間, 1.5 時間)
- 22 大千軒岳 C (1072m, 2.5 時間, 1.5 時間)
- 23 (日高) 神威岳 A (1600m, 5 時間, 3.5 時間)
オプタテシケ山 (2013m) 未踏

IV その他の山

- 39 惠山 C (618m, 1 時間, 1 時間)
- 40 アポイ岳 C (811m, 2.5 時間, 1.5 時間)
- 41 カムイヌプリ C (857m, 3 時間, 2.5 時間)
- 42 武利岳 B (1876m, 3 時間, 2 時間)
- 43 武華山 B (1759m, 2.5 時間, 2 時間)
- 44 楽古岳 B (1472m, 3.5 時間, 2 時間)
- 45 ベンケーヌシ山 B (1750m, 3 時間, 2 時間)
- 46 十勝幌尻岳 B (1846m, 4 時間, 2.5 時間)
- 47 剣山 B (1205m, 3 時間, 2 時間)
- 48 雄鉾岳 B (999m, 3.5 時間, 2.5 時間)
- 49 大平山 B (1191m, 3.5 時間, 2.5 時間)
- 50 遊楽部岳 A (1277m, 5 時間, 4 時間)

V 登ってない山(番外編)

- (1) ペテガリ岳
- (2) チロロ岳
- (3) 愛別岳
- (4) オプタテシケ山
- (5) 駒ヶ岳

布温泉・甘露の森 (0136-58-3800)、昆布川温泉・幽泉閣 (0136-58-2131)。

利尻岳は7～8月宿を取るのが大変。また昔と違つておしどまりコースのみとなつたうえに、頂上直下の登山道の崩落と登山者の多さとが相俟つて意外と時間がかかる。時期をずらして登るのがよい。花の礼文岳とあわせるとよい。稚内温泉・稚内グランドホテル (0162-22-4141)、利尻温泉・アイランドリシリ (0163-84-3002)、一寸足を延ばして豊富温泉・ホテル豊富 (0162-82-1055)。

トムラウシ山は大雪山系の中で一番奥深い山。沼の原、高原温泉、旭岳、天人峡温泉と縦走コースがあるが、避難小屋使用かテント泊のため一寸きつい。トムラウシ温泉に2泊して日帰りがよい。往復12時間は越えるので早出が肝要。カムイ天上からコマドリ沢に入るが途中徒渉禁止のためヤブこぎがつらい(特に下山時)。トムラウシ温泉国民宿舎東大雪荘 (0156-65-3021)。

幌尻岳は日高山脈最高峰。額平川の徒渉時の沢水の量と山小屋幌尻山荘の混み具合がポイント。7～8月の時期をはずし、トッタベツ岳も登れると最高。山小屋に1～2泊しなければならない。沙流川温泉・日高高原荘 (0145-76-2258)。

樽前山は風不死岳と併せ登れる。七合目ま

で車で入り1時間あれば樽前山に登れる。風不死岳のピークはにせピークを過ぎ意外に遠い。丸駒温泉 (0123-25-2341)。

天塩岳は天塩川の水源にある北見山地の最高峰。北海道にしては珍しい立派な山小屋(無人)を利用しての楽な日帰りコース。大雪山連峰がよく見える気持ちのいい山。協和温泉 (0165-86-5815)、きのこのフルコースがお勧め。

暑寒別岳は北大の山の歌に芦別岳と並んで出てくる有名な山。滝川方面から雨竜沼湿原を通り南暑寒岳経由のルートと、日本海の増毛町からストレートに登るルートがある。南暑寒岳から主峰まで2時間はゆうにかかるので増毛町ルートがお勧め。登山口の山小屋暑寒莊に一泊して日帰り。古前温泉ふわっと(0164-64-2810)、ほろしん温泉ほたる館 (0164-35-1188)、7～8月にホタルの乱舞が見られる。

芦別岳は多くのバリエーションルートを持つた北海道では珍しい岩稜の山。富良野の先の山部が登山口。宿も完備されている。新道を往復するのがよい。富良野岳と組合わせて十勝岳で紹介した温泉に泊まるといい。

夕張岳は花の名山。札幌からの日帰りが可能であつたが2004年の台風で登山口の9km手前の林道が崩落、しかも山小屋夕張

知床・硫黄山にて(2004年8月)



ヒュッテも閉鎖のため、テントと食料を担いで往復18kmも余分に歩かなければならぬ遠い山となつた。その分高山植物が保護されそう（金山からルートが未整備ながらある。来年挑戦してみたい）。

石狩岳は石狩川源流の山。大雪連峰の東端の連峰で男性的な稜線と深い沢をもち、原始林を従えた奥深い山の最高峰。十勝三股から入るコースと層雲峡から入るコースがある。前者はシュナイダーコースという急な尾根を上つて稜線（1770m）に着き、そこからは1時間で頂上、日帰り可能である。後者は十石峠経由で山を縦走して頂上へテント持参となる（十石峠からユニ石狩岳へは1時間ちょっとで往復できる）。幌加温泉（0156-44-2167）、糠平温泉・富士観光ホテル（0156-44-2311）。ニペソツ山、ウペサンケ山も」の温泉に泊まるといい。

ニペソツ山は石狩連峰とウペサンケ山に挟まれた秀峰、十勝二股から16の沢に入つた所が登山口。天狗のコル、前天狗と3時間喘ぎ登つたあとに本峰が見えてくる。これは大感激である。三度のアップダウンのあと頂上である。糠平温泉から入るウペサンケ山はニペソツの山容を見ながら登るのびやかな山。ヌカビラ富士（1835m）から優に1

時間だらだらと歩いた最奥に1836mのピークがある。頂上の稜線がこんなに長い山はまずないだろう。疲れていたり天気の悪い時はヌカビラ富士から帰つてもよいだろう。

カムイエクウチカウシ山は日高山脈の中央にある風格ある山、沢コース、尾根コースそして熊への注意と、日高らしい山。アプローチも長く天候次第では、車で登山口までいく林道の状況も心配しなくてはならない。帶広側から入る。札内川8の沢でテントを張り2泊した方がよい。増水時の徒渉、カールでの熊の有無など気を配るため足の揃つた3～4人のパーテイーが最適。帯広駅周辺の温泉として十勝ガーデンパレス（0155-26-5555）、モール温泉北海道ホテル（0155-21-0111）。

ニセコアンヌプリはニセコ連峰の主峰、夏より冬にお勧めしたい山。ニセコ五色温泉からの西尾根コースがよい。羊蹄山と組み合わせててもよい。

余市岳は札幌市の最高峰、夏より冬が面白い。キロロスキー場が登山口。温泉は朝里川温泉、定山渓温泉、札幌市内の温泉ホテルと組み合わせててもよい。

神威岳は沢の徒渉2・5時間、急峻な尾根2・5時間の、南部日高山脈の雄。神威山荘まで車を入れるので沢の増水がなければ山荘に2泊すれば登れる。下山時ガスや雨の時は“慎重に、来た道を忠実に”。新冠温泉・レコードの湯（0146-47-2100）、静内温泉・静内町休養ホーム（0146-44-2111）、浦河ゆうしゅんビレッジ（0146-28-2111）、アポイ山荘（0146-36-5211）、三石温泉はまなす荘（0146-34-2353）。

恵山は渡島半島の活火山、つつじの名所、津軽海峡と下北半島がよく見える明るい山。恵山温泉・恵山温泉旅館（0138-85-2041）。

アポイ岳は花の山、アポイと名のついた高山植物が多い。神威岳で紹介したアポイ山荘を遡り賀老高原が登山口。新道と旧道があるが新道を登るとたやすく頂上が踏める。千走川温泉（0136-74-5409）、モツタ海岸温泉（0136-74-5336）、日本海に沈む夕陽が見事。

が登山口。

カムイヌプリは摩周岳とも呼ばれ摩周湖の第一展望台から湖を左に見ながら半周して登る山。往復15kmと長いが標高差は300m、頂上直下が急だがあとは散歩道。摩周温泉・ベンション・ピラオ(0154-82-2979)、摩周亭萩の家(0154-82-2723)。

武利岳と武華山は稜線でつながっている。ニセイカウシユツペ山と同じ北大雪の山で2山とも静かな山である。当然縦走できるが稜線上は踏跡程度。武利岳は丸瀬布から入る。武華山は国道39号線石北峠の北見よりから入る。丸瀬布温泉・マウレ山荘(0158-47-2170)、白滝温泉・白滝グランドホテル(0158-48-2226)。武華山は層雲峠温泉が近い。

樂古岳は日高山脈南端の山。樂古山荘という快適な山小屋から日帰りで登れる。沢靴は不要(ベンケーヌシ山、十勝幌尻岳も不要)。明るく楽しい山。太平洋がきれいに見える。神威岳で紹介したゆうしゅんビレッジに泊まるといい。馬と出会いのできる珍しい温泉宿。ベンケーヌシ山は沙流川の支流のベンケーヌシ川に沿った林道を車で入れる奥の山。車が入れなくなつた所から更に林道を歩き、途中から沢に入る。沢をつめて稜線に出て尾根づたいで頂上へ。温泉は沙流川温泉がよい。

十勝幌尻岳は帶広側から登る。帶広からの

日帰りは可能。日高山脈が一望できる展望の山。ペテガリ岳、カムイエクウチカウシ山、幌尻岳、トツタベツ岳が見える。温泉は帶広駅前に泊まるといい。

剣山も帶広側から登る。日高山脈展望の山。名のとおり頂上は大きな岩の塊。緊張する頂上である。

雄鉢岳は道南にある岩山である。頂上直下の急なルンゼはロープが頼り。頂上は昼寝が楽しめる平坦な草地で道南の山々と日本海がきれい。八雲温泉おぼこ荘(0137-63-3123)。大きな露天風呂からの雄鉢岳が見事。

大平山は道南の花の山。地元でも高山植物保護のためかルート紹介は一切していない。オオヒラウスユキソウは素晴らしい。狩場山の近くなので一緒に登れる。登山ルートは踏跡程度、急峻な草つきは下山時雨のとき注意。

遊楽部岳は見一岳とも呼ばれ道南の奥深い山。熊が多いので単独行は厳禁。八合目から下つて登るので行き帰りつらい。北桧山温泉・ホテルきたひやま(0137-84-4120)、ねとい温泉(0137-84-5141)。

最後に登りたくてもまだ登っていない五山を紹介して終わりにしたい。この五つの山は登れたら多分五十山に入れたいものと思う。

オオヒラウスユキソウ



。ペテガリ岳は遙かなる山と言われているが、私にとつても遙かなる山である。ここ7ヶ月、林道が崩れ登山口であるペテガリ山荘まで行けない。来年も林道が通れないのなら神威山荘から踏跡頼りに4～5時間重いザックを担いででも行きたい。

チロロ岳は日高の山で、二つの沢をはしごする珍しいルートを持った山。増水や雨のため断念し、頂上を踏んでいない。

愛別岳は永山岳から一寸離れた所にある大雪山の山。ナイフリッジのような切れた尾根の通過がポイント。風が強くてギブアップしたま。

オプタテシケ山は若い頃登ったと思っていたが、記録を精査したらピークを踏んでいない事が判明。手前のベベツ岳で退却したようだ。

駒ヶ岳は登山禁止のため登れない。

槍ヶ岳 北鎌尾根

藤原 朋信（昭44年卒）

8月のお盆休みに北鎌尾根に行つてきました。

天候は今一つで一度も槍の穂先を見ることができませんでしたが、逆に暑さでの体力消耗はなく念願の北鎌尾根を踏破できました。最後は成り行きから計画外の徳本峠越えで島々まで足を延ばし3日間の北アルプスをフルに楽しみました。

（記録）

8月18日..

穂高駅で大阪からのクライミング仲間のAさんとうまく落ち合い、乗り合いタクシーで中房温泉に向かいました。でもどうも私のイメージの夏山と違います。タクシーの運転手さんに聞くと、このところ北アルプスは日本海の前線の影響で天気がぐずついているとのこと。とても青く澄み切った夏山は期待できそうにありません。

Aさんは北鎌のことを考えると今から胃が痛んでいる様子で、私にも不安が伝染してきます。Aさんは三日前まで小川山でクライミングを楽しんできましたので、北鎌の岩稜歩きに技術面での心配は全くありません。今回最初からザイルを持参する考え方もあります。問題は精神面にあり、神経症あるいは不安病という持病と関節磨耗による持久力限界、それに北鎌ではもつとも必要なルートファインディング力の欠如と、三拍子揃っていることです（実際、翌日北鎌沢のコルに這

全然さわやかでない「さわやか信州」に乗ったのはお盆明けの17日水曜日でした。全国の山に出かけるのに夜行バスは良く利用しますが、まず信州号ほど乗り心地が悪いバスはないと思っています。果たせるかなこの晩も隣の人とおしくらまんじゅうで安眠どころではありません。でも値段が安いから文句は言えませんが!!

早朝大阪から同じ時間に着くクライミング仲間のAさんとうまく落ち合い、乗り合いタクシーで中房温泉に向かいました。でもどうも私のイメージの夏山と違います。タクシーの運転手さんに聞くと、このところ北アルプスは日本海の前線の影響で天気がぐずついているとのこと。とても青く澄み切った夏山は期待できそうにありません。

Aさんは北鎌のことを考えると今から胃が痛んでいる様子で、私にも不安が伝染してきます。Aさんは三日前まで小川山でクライミングを楽しんできましたので、北鎌の岩稜歩きに技術面での心配は全くありません。今回最初からザイルを持参する考え方もあります。問題は精神面にあり、神経症あるいは不安病という持病と関節磨耗による持久力限界、それに北鎌ではもつとも必要なルートファインディング力の欠如と、三拍子揃っていることです（実際、翌日北鎌沢のコルに這

い上がつてから当然左の槍に向かうと思つて
いる私の目の前で、右の千天出合方面に歩き
始めた時は言葉を失いただ啞然！）。急造50
代コンビの弱点が懸念されるスタートです。

それでも道がしつかりある（当たり前か）
表銀座は、まずまず順調に踏破し大天井
ヒュツテからいよいよ核心です。ヒュツテか
ら30分弱歩いた貧乏沢の入り口には標識が
ぶら下がっており、まずは一安心、そこから
踏み跡をたどり2時間で天井沢に出ました。

夏の最盛期なので数パーティーはあるものと
予想してきたのですが、貧乏沢に入つてから
誰もいません。結局、翌日槍の頂上まで人ら
しき姿を見かけませんでしたが、そうなると
相棒の不安症は高まる一方、広くて快適な北
鎌沢出合のテント場も寒々しく見えるのか、
胃が痛み始めて早々とテントにリタイアです。

更に悪いことに夜半から雨で、4時発をあ
きらめ霧雨に変わった5時35分にようやく
出発です。北鎌沢右俣が今回のルートですが
よく道を間違えるクライマーハイハイにやは
り捕まり10分のロスです。槍頂上まで8時間
の行程を考えると道に迷うのは痛いので慎重
にと思うのですが、視界が悪いので独標から
の下りでも天井沢への支尾根に迷い込み15
分ロス！ それでも岩稜でのルートは行き詰
まる事もなく14時50分に穂先に着くことが

出来ました。展望ゼロでしたが心は満足、遅
くなつたので肩の小屋泊まりと決めて頂上に
て大休止、見えないながら北アルプスの峰々
を眺めて相棒と握手です。

肩の小屋で宿泊手続きをしていると、家に
電話していた相棒が側にきて可愛がってくれ
た伯父さんが亡くなつたというので、急遽目
の前のビールをあきらめ下に下りる決断で
す。夕方遅いため登山者も少なく、北鎌尾根
に比べ格段に歩きやすい道を飛ばします。関
節炎のはずの相棒も自分の事情なので文句も
言わずに（言えずに）20時に徳沢でテントを
張るまで頑張り通しました。

翌朝、朝一番のバスに乗る相棒と別れて徳
本峠の道に入りました。朝から帰宅してもし
ようがないし、生来のけち精神でバス代も節
約できるし、久方ぶりに島々谷の蝶々を見る
ことも出来るという訳です。島々谷はところ
どころ道が崩れていましたが、落ち着いた昔
ながらの味わいがありました。なぜか行き交
うパーティーは女性ばかりです。それも結構
美人揃いです。山旅の終わりに神様の贈り物
と喜びながら全3日の北鎌尾根山行を終えま
した。

（今回槍ヶ岳を一度も拝めなかつたので、來
年5～6月に再訪予定です。今度は上高地か
ら水俣乗越経由天井沢に入り、翌日北鎌沢左

俣を詰めるつもりです）

「シングルトラック」

引地 真（昭55年卒）

昨日から悪寒と吐き気が激しくて、寝込ん

でしまつた。

川名さんから会報の原稿を頼まれていたの
で、何とかしなければいけないのだが、最悪
の気分だ。今はベッドにノートPCを持ち込
んで、寝ながら書いている。

会報の原稿だけど、特に話題は山登りに限
定しないと言われているので、少しは気が楽
だけど、やっぱり山に関する事を書きたい。
近況報告といいながら、自分がやつたことを、
ちょっと自慢げに書きたいものだ。しかし、
最近、山に行くこともめつきり少なくなった
ので、もともと書くこともなく、今回は何を
書こうかな、と悩んでいた中で無理やり思い
ついたテーマが「シングルトラック」だった。
シングルトラックといったって、何のこと

か分かる人は少ないと思う。実は、普通の登山道のことだ。山歩きをするとき、何気なく「道」と言っているものだ。山歩きの道が、なぜシングルトラックなのか。シングルトラックがあるのなら、ダブルトラックはあるのか、シングルトラックの初心者である僕には分からぬ。どういう連中が山歩きの道をシングルトラックというのかというと、自転車乗りたちである。いわゆるマウンテンバイクという自転車で登山道を走る奴らが、カッコよくシングルトラックというのである。要は、道幅が狭く、人ひとりが通れる幅の道、もちろん舗装なんかされていない山の中の道のことを見字で言っているだけである。

僕が山歩きの道を自転車で走ることを知ったのは、今から6年くらい前、京都に住んでいた時だった。京都は周囲を山に囲まれていて、山と生活圏がとても近く、自宅から自転車で山歩きに出かけられた。最初は、登山口に自転車を置いて、道を歩いて登っていたのだけれど、そうして出掛けた山で、自転車に乗っている人に何度も出会つた。京都の周りの山は、標高も高くないし、樹林に覆われているので展望も利かないところが多い。何度も山歩きをすると、刺激がなくなってきた。道は頂上への過程でしかなく、山歩きがマン

車で登山口まで行くだけでなく、そのまま山の上まで行つたらどうだろうか、ということだった。

早速実践してみた。最初は、林道をどん詰まりまで自転車で進み、そこから自転車を押したり、引張りあげたりしながら峠まで担ぎ上げ、峠からは稜線上を自転車で走れる限りは走つて、別の峠から下に降りる。すると、頂上までの通路でしかなかつた「道」が「シングルトラック」になつたのだ。

のんびり山登りを楽しんでいる人には、後ろから自転車にチンチンと鳴らされて道を譲らされたら迷惑だろうが、僕には新鮮な喜びだつた。そして、自転車で山に行つてみて分かつてきたのは、山登りと自転車とはやはりそれぞれ楽しめる場所が違つてゐるということだつた。自転車を押したり、引張つたり、担いだりすることは、それなりに面白いが、そればかりだとつまらない。自転車の楽しみは、降りのスピード感や一瞬のハンドル操作やコブを飛び越えたり、といったペダルを踏んでいる時の方が圧倒的に面白いのは言うまでもない。

そうなると、高い頂上のある山よりも、里山のような林の中や廃道になつた林道の方がフィールドとしては面白い。京都の自宅周辺

にはそんな場所がいくつかあつた。千葉県に引っ越して見つけたのは、房総の山だつた。房総には高い山はないけど、廃道になつた林道がいくつもあり、そこには素掘りのトンネルがあつたりして、楽しめる場所がいくつもあつた。多摩の方では、日の出町の裏山など奥多摩の手前の里山に結構面白いフィールドがあつた。ちょっと目のつけどころを変えてみると、自宅の近所でも、神社の裏の雑木林に自転車で突っ込んでみると、楽しめる場所は見つけられる。比較的自宅に近いし、自宅から自転車で出発できるので、これなら山に行くための早起きも必要ないし、テキトーに自宅の近所をブラブラしながら楽しめる。時々ひとの畑の中に迷い込んだり、転んで擦り傷ができたりするのはご愛嬌である。

とは言つても、お手軽なだけ、山登りほどの達成感が得られるわけではない。自転車で憂さを少しずつ晴らしながらも、やっぱり山に行きたいなあと思つてしまふ。

昨年末、久々に山に出掛けた。稻子湯から天狗岳をめざした。天候が悪かつたので、途中で引き返したけれど、雪の山を歩く楽しさを思い出した。今年は自転車だけでなく、山にも出掛けたつもりだ。

と書いてみたけれど、熱で頭がフラフラする。

鳥取での山登りライフ（上）

田形 祐樹（平6年卒）

ハマつ子、鳥取へ

私は、住み慣れた横浜を離れ、それまで通過したことすらなかつた鳥取で、平成17年6月末から一年間限定で、生活する機会に恵まれている。そこで、鳥取という地方での山登りライフ等について、平成17年6月末から11月末までのことについて思いつくままに書いてみたい。さらに書くべきことが出てきたら、（下）として、12月以降のことを、後日書いてみたい（ということで、本稿（上）で終わる場合もあります）。

地元の山岳会？

私の今の仕事はさして忙しいものではないので、鳥取に来ても山登りをしようと思いつたので、地元の人と知り合いになろうと思つたので、地元に山岳会があれば顔を出してみて、調べてみた。鳥取市内には主な山岳会が一

つしかなかつた。そこで、そこに問い合わせをしたのだが、今もつて返事がない。諦めて、個人で登るか、針葉樹会の山行に合流するか、にすることにした。

中国地方では、広島、岡山では山登りをしている人も多いようだが、鳥取ではあまり山登りに人気はないらしい。登山人口も少ないようだ。登山用品専門店もない。クライミングのジムもない。この辺は、地方ならではの不便なところである。仕方がないので、横浜の実家に帰った時に装備を持ち帰つたり、東京や横浜の店に寄つて装備を買つたりしている。

不便なところである。仕方がないので、横浜

ところであろうか。

また、車で20分くらいのところに、鳥取砂丘がある。「馬の背」という、山のようになつたところがあるので、その急斜面を、ザックを背負つて駆け上ると、よいトレーニングになる。私はまだやつていないが、大学山岳部員らしき人がトレーニングしていた。

トレーニング環境

同好の士が少なかつたり、登山用品専門店がなかつたりする点は、地方のデメリットである。しかし、メリットももちろんある。住んでいるすぐ近くに、素晴らしい自然がある点である。

中國地方には、あまり高い山はないが、

1000メートルくらいの山なら、鳥取市内からでも車で、すいた道を2時間くらいで行ける。トレーニング山行にはぴつたりである。中国地方の山といえば、大山である。ただ、西部にあるので、東部の鳥取市内からだと、すいている道とはいえ登山口まで車で2時間半くらいはかかる。

今夏、地元の山好き人と一緒に、地獄谷という沢筋のコースから登つた。また、一般夏山登山道からも登つた。前者は人も少なく、おもしろかつたが、後者は人が非常に多い。登山道から頂上まで1時間半くらいで行けるので、トレーニング用に使うといいだろう。

登っている。高さ約250メートル、登り12分、下り8分で、毎日最低1回はやることでかなり心肺機能が高まつた。頂上からの眺めが素晴らしい。市街地が一望できるのはもちろんのこと、鳥取砂丘や、天気がよければ大

山や隠岐諸島も見ることができる。市街地が近いにもかかわらず、私は蛇や狸だけでなく、猪も見たことがある。さすが？ 鳥取というと

また、晴れた日には日の出が素晴らしいらしい。私は、先日、日の出を狙つて、朝2時に車で鳥取市内を出て、頂上まで登りきったのだが、あいにくガスの中であった。

今シーズンの冬も大山に登ろうと考えている。

登山後の楽しみ

鳥取にたくさんの温泉がある。登山後に寄るにはぴったりである。私は、大浴場や大規模ホテルは避けて、地元の人しか行かないような共同浴場や鄙びたところを探して入るようしている。健康ランドのような大きくて循環湯のエセ温泉ではなく、源泉掛け流しのホンモノの温泉が結構ある。鳥取市内の市街地にも温泉があり、朝の裏山トレーニングが終わって、出勤前に時々温泉に入っている。

東京や横浜だと、山から下りてきて、車で温泉に寄つてから家に帰るのに、渋滞に巻き込まれてうんざりしてしまう。しかし、鳥取は人が少なく、道はよく整備されガラガラ、景色もいいので運転するのが楽しい。横浜にいた時は車があまり好きではなかつた私ですが、ドライブが好きになつてしまつたほどである。

加藤文太郎、植村直己

「孤高の人」で有名な加藤文太郎は、兵庫県北部の浜坂出身で、当地には加藤文太郎記念図書館がある。普通の公共図書館の内であるが、加藤ゆかりの物の展示コーナーや山岳図書コーナーもある。山岳図書コーナーも、それほどたくさんの中本があるわけではないが、古い貴重な山岳本から新しい写真集まであり、山の本が好きな者は一日いても飽きることがないであろう。

また、植村直己も、同じ兵庫県北部の日高町出身であり、当地に植村直己記念館があり、彼が使用した登山用品等が展示されており、フィルムが上映されたりしている。

針葉樹会員、歓迎！

私は平成18年6月末まで鳥取に在住予定です。是非、鳥取にお越しください。山行と観光と問いません。針葉樹会員であれば、旧知にかかわらず歓迎いたします。レンタカーで、山へ、温泉へ、観光地へ案内します。これから3月くらいまでは松葉蟹の季節です。また鳥取は日本酒もおいしいところです。

私が好きな鳥取を案内するのは嬉しいですし、私自身、お客様の案内のたびに、少しずつ違う場所に行くようにしてるので飽きることもありません。また、鳥取にいると横

浜にいたことと違い、針葉樹会の皆さんに会う機会も少ないですし、山について語る人も周りにおらず、淋しいというのもあります。遠慮なく、田形までご連絡ください。

中島寛氏蔵書を大町山岳博物館に寄贈

中島寛未亡人より、中島氏の蔵書のうち山の関係約九〇〇点（ちなみに一般の本はこの数倍ある由）を大町山岳博物館に寄贈したとのお知らせがありました。博物館では当面既存の収蔵資料と同一に扱うこととし、書庫に保管、閲覧希望があれば指名された本をお見せするという形になる。現在は閲覧室といつても大きなものではないので、そこに置くことはできないが、同博物館と信州大学が本格的な図書室にする計画があり、いずれはそこに置かれることになるのではないか、とのこと。

中島氏と親しかつたアーヴィングの松永さんが、博物館に話してくれ（博物館長と同氏が親しい）、どんどん拍子で決まった。

追悼 春日井 実 氏

2005年夏・雲の平の記録

：春日井との最後の山行

佐薙 恭（昭31年卒）

山岳部同期の春日井との山行が復活したのはお互いに自由の身になつてからしばらくたつた2001年頃からだつた。最近5年の間に彼と一緒に出かけた山行は20回近くになつていた。その殆どは針葉樹会の人たちとのグループ山行か、私の行きたい所への山行を私が提案し、それに彼が参加するタイプの山行だつた。一方、彼自身の行きたい場所は雲の平で、それをずっと聞かされていた私はこの夏、先ずは自分の好みを抑えて彼の長年の希望の場所、雲の平に行くプランを立てた。雲の平は彼が大学時代に縦走した剣・槍と槍・鳥帽子の間に挟まれた地域で、今はともかく、あの頃はほんとに秘境と言えるようなエリアだつた。彼はきっとその頃から雲の平

への思いを持ち始めていたのだろう。この山行には同期の石和田も早くから参加を決めていた。

この夏、春日井は7月下旬に中学時代の友人との中国旅行、8月に入つてからのご家族とのハワイ旅行、引続いての関西滞在、高校野球観戦と忙しかつた。久し振りの彼からの連絡は8月16日深夜のEメールだつた。彼の自宅に残されたパソコンの送信記録の殆ど最後に近い筈のこのメールの全文をここに再録する。

「今日やつと長い草鞋を脱ぎました。宮城沖の地震の影響が東海道新幹線にもあつて大分遅くなり疲れ果てました。明日から銳意雲の平についての勉強を致します。（3年前に調べたのはもうすっかり忘れてしまいましたので）スケジュールについては全て佐薙兄にお任せで申し訳なく思つています。これから休息をたつぶりと取りますので小生は当初の予定どおりに22日以降でしたらいつの出発でも結構です。今の所台風の情報は無いようですね。取敢えず帰京のご報告まで。」

お盆休みも過ぎ、山も空きはじめただろう8月下旬、三人の山行が始まつた。計画は1

日目富山、2日目太郎平小屋、3日目雲の平、4日目高天原温泉往復、5日目鏡平、6日目新穂高温泉に下山し松本を経て帰宅という、5日目を除いて割合い余裕のあるものだつた。

8月22日

三人はこの日上越新幹線とほくほく線を使い夕方富山に入り、駅近くのビジネスホテルに泊まつた。夕食時に外へ出ると小雨がぱらついていた。直前に発生した台風12号が近づいているので天候次第ではコースや日程についてはオリジナルの案にこだわらず弾力的に行動しようと話し合つた。石和田はウーロン茶か何か、春日井と私は富山の地酒を少々。ふだん余り酒量の多くない春日井が「今回はきっとどこかで台風一過の快晴になるよ、下山したら松本で盛大に祝杯をあげよう」という。大分気合が入つている感じだ。

8月23日

5時に窓からまだうす暗い外を見ると街灯の下の水溜りに弱い雨が降つてゐる。雨衣上下で出かけることにする。ホテルの主人が地方紙の天氣予報を見せてくれた。今日は雨、明日は回復するという。5時半予約してあつたタクシーで折立へ向う。

6時少し前、有料道路・有峰林道の入口に

着くと雨はやや強くなってきた。そして「雨のため道路閉鎖」と表示されていた。過去24時間の雨量が制限の80ミリを超えたためだという。料金所の人々の話では雨は昨夜遅くから今朝方にかけて多く降っているので、これから雨が小降りになつたとしても再開はかなり後になるだろう、路線を視察するパトロールカーも何時来るか判らないという。折立には宿はないことは知っていたがその手前の有峰に宿があることは初耳だった。電話でその宿の人と話をするとまだ朝が早いせいか相手の受け答えは要領を得ないが、先ずは泊まれそうな様子だ。ここで引き返す訳にはいかない。少しでも前進しよう。ということでタクシーは帰つてもらい約14キロの道路を歩くことにする。カモシカが落すかもしれない落石に気をつけるようにとの注意が料金所の人からあつた。予期しないことがまだいくつ起きるかもしぬないと何となく感じさせるスタートだった。

時々激しい雨、幾つかの長いトンネル、至近距離でのカモシカとの出会い、4時間後には有峰湖の近く、予想以上に立派で新しい「有峰ハウス」に着いた。ここまで来ると雨はあがつていた。

下山して来た数人の登山者が道路の再開を待っている。情報を集めてみると、事前に太

郎平小屋から電話で聞いていた通り、薬師沢小屋から高天原へ直接行く大東新道は崩壊個所があり避けた方が賢明なこと、薬師沢小屋から雲の平山荘へ行く道は、大雨の後は吊橋の向こうでハシゴで川筋に下つてからの道が数十メートルほど水没し、水量如何では徒渉も高巻きも危険なこと、などが再確認された。

そこでこれから先、雨が多いようだつたら我々は雲の平はあきらめ太郎平から稜線伝い

に黒部五郎、双六、新穂高温泉へ、台風の進路如何では途中の沈澱もあるべし、というオプショナルプランを持つこととした。
午後は濡れ物を乾かしたり風呂に入つたりTVを見たりして過した。

8月24日

雲量10だが雨は降っていない。朝飯は弁当にしてもらい5時15分、有峰ハウスを出る。



2003年8月、唐沢岳頂上での春日井氏

1時間半ほど遊歩道と呼ばれる山道を歩き折立に一日遅れで着く。昨日道路が閉鎖されなければここまでタクシーを利用し、ここから本格的に歩き始める予定だったのだ。軽い朝食の後、7時折立発。太郎平まで高度差900m、コースタイム5時間のところを、三人とも快調に歩き数回の休憩を含めて5時間弱、正午前に太郎平に着いた。我々を導くように飛んでいたこげ茶色の小型の蝶は後で調べたらクモマベニヒカゲだった。天候は若干好転し、薬師が真近に巨大な姿を見せていた。

これから先、しばらく雨が降らないとすれば、明日薬師沢小屋の吊橋の先の徒渉も問題なさそうだ。春日井が太郎平小屋の受付で天気の情報を集める。台風12号はどうやら関東地方に向っているようだし今晚この辺り雨は降らない見込みだという。予想より大分良い情報に春日井は嬉しそうだ。これならあと2時間強歩いて薬師沢小屋まで行こう。そうすれば昨日ロスした行程の半分は今日取り返せるではないか。明日は雲の平山荘泊ではなく高天原まで足を伸ばして温泉に入ろう。稜線歩きというオプショナルプランは封印出来る。

12時半太郎平を発ち、薬師沢小屋に向かう。この下り道は概ねよく整備されていた。2、3種類のリンドウが道端に咲いていた。3個所ほどの橋を渡りあと30分もすれば薬

師沢小屋に着くという地点で14時過ぎ、第一のハップニングが起つてしまつた。

その場所は垂直に近い急な下りの段差約2m、木の根と粗末なハシゴが入り組んでいた。私の前を歩いていた石和田がこの下りで木の根かハシゴかに足をひっかけ、逆さまに頭を下に投げ出され、コース脇の笹の中に叩きつけられたのだ。声は出せるがしばらく動けない。二人がかりでなんとか傍らの岩に座らせる。頭や顔に外傷は見られず、手足の骨折もないようだ。しかし右腕を強打したらしくしびれているという。すぐには動かない方がよいだろうと判断する。しばらくして私が自分と春日井のザックを担いで小屋まで行き空身で戻つてくることにし、その間に石和田の体調が回復したら春日井が石和田のザックを担ぎゆっくり下るという手筈にした。

私が小屋に二つのザックを置き、その現場に戻りつく前に二人は下り始めていた。その辺りはカベツケケ原と呼ばれる湿地帯で、転倒の場所から下は木道で歩きやすい。しかし小屋の直前で急な岩の多い下りの道になつていた。ここで二番目のハップニングが起つた。その部分はたまたま平坦だったが石和田がバランスを崩し道の脇に今度は足から先にストンと1m強落ちてしまった。さつきの転倒のせいで足がふらつき、ふんばりも効かないよ

うだつた。今回は新しい追加のダメージはな

いらしいが、手の握力もしびれで弱っているのかその1mを登りなおすのが一苦労だつた。

一晩休めば回復するのだろうか心配だつた。

8月25日

翌朝、沢の音がひつきりなしに聞こえるが幸い雨ではない。石和田の体調回復が心配だつた私は朝食前、一人に次のような提案をした。夜半目覚めた時に考えていたことだつた。「石和田の体調が心配だ。良くなれば自分は石和田と一緒にここから引き返す用意がある。一旦雲の平に入つてしまえば抜け出すには3日はかかるだろう。雲の平行きは春日井の長年の希望だつたのだから、ここでパーティを分けて単独で行つたらどうか。」

この提案に対する二人の反応を要旨だけ直接話法的に再現すると、春日井「自分一人で行くというのは問題だなあ。」しばらくして石和田「体調は万全ではないが多少ゆっくりなら自分は行けると思う。票決で決めるなら2票が「前進」で私の1票を待たずに決まり。それなら行くしかないか。石和田の心境は、決して良くはなつていないので自分の体調よりも春日井の雲の平への長年の思いを優先させたのだつたと思う。」

今にして残念なのはこの時点で私が石和田

の様子をもつと正確に見抜き、「山はなくならない、来年出直そう」と、ここからの三人での引き返しを粘り強く主張し、実現させていれば今回の悲しい出来事は起らなかつたのだ。春日井は発病しなかつたかもしれないし、たとえしたとしても下界ですぐに医者に駆けこむことが出来たのだ。

6時過ぎ、小屋を出て問題の川筋の徒渉もなく、雲の平に向う。天候は曇、笠は見えたが槍・穂高は雲の中だつた。高度差500m、コースタイム3時間半。前日の登りほどの快調なペースではなかつたがそれほど大きな遅れはなく正午雲の平山荘着。しかし石和田の歩きのバランスは依然良くないので、途中から石和田の荷物は彼が持参したサブザックに必要最小限のものとし、一番小さい春日井のザックは私の胸に、石和田のザックを春日井が担ぐという方法を取つた。山荘の小屋番はいずれ新穂高方面に抜けるつもりならあと2時間ほどだから今日のうちに三俣山荘まで行けと奨める。今日なら確実に黒部源流を渡れるが、今夜大雨なら明日は渡れないこともあるから、という。我々は明日渡れなければここでゆっくり連泊するつもりだといつて納得させた。もはや高天原温泉往復のプランは忘されることにした。

この辺りでは三人の気持ちにはまだゆとり

があった。石和田はふだん頭のあがらないらしい奥方に、自分の転倒がばれると次回から山に行けなくなるから奥方の検閲があるメールでは転倒のことは書かないでくれ、と言う。二人はにやにやしながら「口止め料は高いぞ」と応じる。

午後、石和田と私は昼寝を決め込んだが、春日井はカメラをぶら下げて一人で待望の雲の平散策をたつぱり楽しんでいた。

夕食後、春日井と私は、担ぎ上げた強い酒をスポーツドリンクで割りながら、ロビーに置かれたストーブの火の傍らで明日の荷物の割り振りを相談した。酒を飲まない石和田はもう二階の寝室で休んでいるようだつた。結論は先ず一番小さい春日井のザックと石和田の中型のザックを交換する。そして石和田のザックは私の胸に、石和田のザックを春日井が担ぐという方法を取つた。山荘の小屋番は荷物のうち春日井のザックからオーバーフロウする分は春日井と私が分担しようと決めた。何しろ明日は祖父岳分岐からオーバーフロウする分は春日井と私が分担しようとした。黒部源流にかけて下ることになる。道はジグザクに作られているので道そのものはそれほど急ではない。しかし、しびれが原因で両手の握力が弱つてゐる石和田は、岩やハイマツをつかんで下るような動作に難儀している。ストックをしつかり握れなくなつていて、彼のストックは私の手にあつた。まだジグザクを下り始めてほんの僅かの地点で、彼の第三のハップニングが起つた。

8月26日
天候は曇。黒部五郎はよく見えるが槍・穂高はまだ雲の中だ。この朝、春日井は初めて

「食欲がない」と言つて朝飯に手をつけなかつた。「少し胃がおかしい。胃潰瘍ではないかと思うんだが」と言つていた。体は細身だが、シルクロード・サイクリングで鍛えた体力がある彼のことだ、一食抜いたからつてどうということはないだろう、というのがその時の私の感じだつた。

6時少し過ぎ、山荘を出る。湿地帯の木道を行くと、目と鼻の先をライチヨウの親子5羽がのんびり歩いている。春日井がデジカメで捕まる。「久し振りだ、大学の時以来かなあ」とつぶやいている。1時間少しで祖父岳分岐。眺望は期待できないし、先を急ごうという気持ちで私の希望だつた祖父岳山頂往復は割愛。やがて高度差300m弱の急斜面を黒部源流に向けて下ることになる。道はジグザクに作られてゐるので道そのものはそれほど急ではない。しかし、しびれが原因で両手の握力が弱つてゐる石和田は、岩やハイマツをつかんで下るような動作に難儀している。ストックをしつかり握れなくなつていて、彼のストックは私の手にあつた。まだジグザクを下り始めてほんの僅かの地点で、彼の第三のハップニングが起つた。

ゆるい傾斜の岩道で彼の足が何かにつまずいたのだろう。オットツトという感じで数歩走りだしジグザクの曲り角に全身で突つ込まれることにした。

でいった。昨日の第一の転倒よりはインパクトは小さいようだつたが、明らかに左の頬とおでこの左を強打しているし、シャツの左肘が破けて肘に切り傷がある。破れたシャツは帰宅前に捨ててしまえばバレないだらうが、この肘の傷は帰宅後きつと彼の奥方に見破られてしまうかな、というのがその時の私の心配だつた。それから先はいやが上にも慎重に、時間をかけて私の先導で下つて行つた。やがて黒部源流にたどりついた。対岸に向けてロープが固定されている。それを使いながら大きな岩、5個ほどを跳ぶように渡る。この日の水量は少なかつたが、増水の場合苦労するのは間違いない。

黒部源流から三俣山荘までの登りは緩い傾斜でコースタイム45分。ミヤマトリカブトが咲き乱れている。この快適な登りならもう転倒の心配はないだろう。私は自分のペースで先行して三俣山荘近くの水場まで登り後続を待つた。30分ほど遅れて一人はやつてきた。二人はこの登りで何回か休んだようだが、私は先行してしまつていたのでこの間での二人の体調がそれぞれどうだつたのか、この短い登りに何故そんなに時間がかかったのか、私は自分の目で見ることが出来なかつた。ここまで時間は我々には無理として、コースタイム2時間は我々には無理として、昨日の小屋番の言う

3時間15分のところを大休止なしに5時間45分もかかっている。

この先せめて双六小屋まで行くつもりだつたがそこへのコースタイムは更に3時間弱。今までのペースで疲労要素を考えこう干後の

アルバイトとしてはちょっと無理ではないか。そこで私はまだ正午だが三俣で泊まるうと一人に提案した。この提案はもっぱら石和田の歩きのバランスとベースがまだ悪いことを考えてのものだつた。春日井が朝食をスキップはしたが彼が病気かもしけないと、認識は、この時点では私にはまつたくなかつた。石和田の反応は助かつたというニュアン

たっぷりな睡眠と休息にもかかわらず春日井の体調は戻つていなかつた。彼が病人であることは今やはつきりしてきた。荷物の割り振りは前夜、オリジナルにもどした。すなわち、春日井は一番小さい彼のザックで彼の軽い荷物を担ぐ。石和田は自分のザックでやや重い自分の荷を担ぐ。石和田よ、もう転ばないでくれ。

6時25分山荘発。三俣蓮華岳への軽い30

分ほどの登りで春日井のペースが極めて遅いことが判つたので私が彼のザックを自分の胸に担ぐことにした。双六小屋への途中、我々と少し離れた場所で春日井が空身で寝転んで休んでいるのを見た登山者が、自分は医者だが、といつて春日井と会話を交わした。春日井が自分は多分胃潰瘍かもという思い込みで胃痛や吐き気のことを持たしたのだろう。その人は胃潰瘍なら胃に穴があかないよう尼小屋でホットミルクを買って飲むと良い。ミルクは胃に粘膜をはつて守ってくれるから。そして出来るだけ吐かないようにとのアドバイスを残して去つた。この時もう少し会話が進展

し、彼の病気の真因が胃以外のところにあるかも知れないとこの人が気付いたら……、展開はきっと違つた形になつただろう。残念な、悔やまる逸機だつた。

後になつて思うのに、今回の山行でヘリコ

プターの救助を求めるしたら地形的に適地は三俣山荘付近か双六小屋あたりだつたろう。我々はそのエリアを過ぎようとしていた。

双六の小屋で春日井は先ほどのアドバイスに従い、ホットミルクを求めて飲んだ。この辺りやや好天となり、一昨年彼と歩いた燕、餓鬼、唐沢が望まれた。正午ころ、我々は双六小屋を後にして鏡平山荘に向けて下つた。双六小屋の番人に「三人、うち病人一人、怪我人一人、が少し遅く着くかもしれないが」という連絡を鏡平山荘にして欲しいと依頼した。三俣から鏡平まで今日一日のコースタイム4時間半ほどのところを約2倍の時間をかけて夕方4時過ぎ鏡平山荘に着いた。8月最後の週末、人気の鏡平、幾つかの団体ツアードで小屋はほぼすし詰めの満員であつた。「病人と怪我人」という予約のせいで我々にはほんの僅かだが優遇されたスペースが与えられた。この夜春日井が口にしたのはやはりホットミルクだけだつた。



1955年7月、剣沢合宿での
オーション会メンバー。
前列左から 甘利、宮川、
高崎、吉田、中村(Y)
後列左から 石和田、
瀬田、春日井、佐藤

8月28日
この日は今回の行程で一番の好天だった。槍から西穂高までが目の前に広がっているのだが春日井にも我々にもこの素晴らしい眺望を楽しむ余裕はもはやなかつた。

なんとか自力で下山しよう。しかしこなさなければならぬ高度差は900m残されている。コースタイム通りなら4時間15分でタクシーがつかまえられる。風呂など勿論後回し、松本の救急病院に彼を送り込もう。7時に小屋を出る。はじめて春日井の靴の紐を私が結ぶ。小屋番達の激励を受けて歩き始めるが空身の彼のペースは今迄以上に極めて遅い。少し歩くとすぐ腰を下し横になる。このままのペースだったら日没前に下山出来るのだろうか心配になる。普通なら1時間弱で着くシシウドガ原、その少し手前を11時半頃歩いていていると、一人の若い登山者が登ってきた。我々の様子を見て、自分は岐阜県の山岳警備隊のメンバーだが休暇で登ってきた、お手伝いしましようか?と聞いてくる。

私は脱帽し頭を下げて「お願ひします」と頼んだ。彼はここが遭難地点でいま遭難救助の要請を受けたとして、てきぱきと携帯で関係先と連絡を始めた。もう一人の警備隊のメンバーがすぐ出動してくるという。更に春日井を担いで下す必要上、あと二人の民間の救

助隊員を呼ぶ、この人たちは有料だと告げられる。岐阜県の救急車も手配された。救急車の行き先は岐阜県神岡町。長野県松本という選択肢はもはやない。この時後から歩いてきた単独行の登山者の一人が自発的に協力を申し出てくれる。彼は今は会社員だがもと山岳ガイドだったという。我々三人とこの二人でゆっくりと下降を続ける。

新しい二人から春日井に激励の声が飛ぶ。13時半もう一人の警備隊員が下から登つてきた。この人は春日井を担ぐハーネスを持つてきた。ここで春日井は警備隊員の背中で運ばれることになった。更にしばらくすると民間の救助隊員も二人上ってきた。四人で交代で彼を担ぎ下ろす作業が続けられた。昨日の朝からずっと私の胸にあつた春日井のザックは四人に取り上げられてしまった。私は抵抗したがほとんど命令だった。春日井との仲を引き裂かれる思いだった。四人と春日井は私の足では追いつけない速度で下つて行く。石和田も依然歩き方に問題はありつらかっただろうが何とかこの下りを無事にこなすことが出来た。

15時過ぎ、一般車は入れない林道の終点で警察の車と民間の救助隊員の車が待っていた。春日井は警察の別の車すでに運ばれていた後だつた。石和田、もと山岳ガイドと

私の三人も2台の車で新穂高温泉のバス停近くの派出所まで運ばれた。春日井はここで救急車に移され少し前に神岡に向つていた。派出所で私はグループのリーダーとして、最初に会つた警備隊員から事情聴取と、今後私がやるべき手続きの指示（春日井の診察の結果を高山警察署へ電話で報告すること、民間救助隊への後日の報酬支払方法など）を20分ほど受けた。その人は志村さんといい、新穂高温泉派出所の警察官だった。後から参加の警備隊員は逢坂さんといい平湯派出所の警察官でこの辺りで最強のベテラン警備隊員だとのことだった。二人とも何も起らなかつた時に酒を酌み交わしたいような好青年だった。

17時ころだろうか、石和田と私はタクシーで春日井の後を追つた。神岡町の飛驒市民病院は立派な病院だった。既に春日井は一応の検査をすませ、ベッドの上で酸素吸入を受けていた。看護婦さんが東京の彼の息子さんと連絡を取るのに苦労していた。春日井の依頼で我々も番号調べで彼の娘さんの電話番号を探そうと試みたがうまくいかなかつた。そのうち院長（兼外科長）から我々に彼の病状の説明があつた。虫垂炎で消化管のどこかに穴があいている、すぐに手術を行うという。手術結果を後で話すからまた来るようによこと。

取敢えず我々はタクシーの運転手が手配してくれたビジネスホテルに行き、シャワーで数日間の汚れを落し乾いたシャツに着替える。そして近くのコンビニでおにぎりを求め、手術完了の知らせを宿舎で待つた。夜10時過ぎだらうか、呼出しがありまた病院に行く。院長から詳細な説明を受けたが見通しは極めて暗いことが判つた。また院長からは息子さんと連絡が取れた、息子さんは明日来られる筈と言われた。体力のある彼のことだ、何とか頑張つて元気になつてくれ、と石和田と祈りながら暗い町をまた宿舎に戻つた。三人にとってそれぞれ長く苦しい、つらい一日だつた。

8月29日

朝、始業前に病院に行く。東京と大阪から親族の方が明け方に着かれていた。二人で今までの経過をお話する。ご家族にとつてはついこの間の楽しかった夏の思い出がまさに暗転しかかっているのだ、到底納得されなかつただろう。その後、石和田は自分自身の精密検査を急ぐため神岡を発つて帰宅した。

8月30日

可愛がつていたお孫さんを含む親族の方々に見守られている春日井を残して、私も後ろ

髪を引かれる思いで神岡を離れた。

8月31日

春日井が神岡の病院で12時半亡くなつたとの電話での知らせを付き添いの長男の元（はじめ）さんから横浜の自宅で受けた。彼自身と、ご親族の無念さと悲しみに言葉も出ない。

* * *

春日井とは近い将来も幾つかの山行を一緒にしようと話し合つてきた。具体的には秋の富士山（彼はまだ登つてなかつた）、丹沢の桧洞丸から蛭、来夏、南アルプスの3000m級のどこか。もつと近いところでは80才の石井、山崎両先輩と一緒にこの9月上旬、春日井、石和田も参加して南アルプス、塩見に出かけるプランが控えていたのだが。

帰宅して数日経つた。今回ることは天命なんだ、お前はやるべきことはやつたのだと言つてくれる友人もいる。春日井は雲の平に行けたことを喜んでいるに違いないという仲間もある。一方、何故ヘリコプターの救助をタイムリーに求めなかつたのかという声も聞こえるし、そう思つている人も多いかもしれない。どんな批判も受けなければならない立場

2001年9月、奥穂高岳山頂にて。
左から 松尾、春日井、
石和田、佐薙、高崎



後記

今回の事故の後始末に関して、多くの会員からのご支援にお礼を申し上げます。先ず有償・無償を問わず救出活動に直接従事或いは協力して下さつた方々へのお礼について、会の関係各位のご配慮により会の遭難積立基金から支出して頂きました。また事故後、同行者二人に対して、多くの会員の方から適切な助言、ご指導と暖かい激励のメッセージを戴きました。有難うございました。

尚、山行中に転倒した石和田は下山後の精密検査の結果、頸椎の一部に損傷があることが判りました。手足のしびれが残っている為、完治を期し、治療にあたることを本人に代わりご報告します。

に自分が置かれていることはよく判つていい。しかし今となつて私が彼に出来ることは、安らかにお眠り下さい、そしてご家族の皆さんをお守り下さい、と祈ることだけだ。残念で悲しいことだが。合掌

◆◆◆◆◆

晩夏の雲の平

石和田 四郎（昭31年卒）

春日井君の長年の念願だつた「雲の平」行
きにお供することになった。

佐薙君が詳細に研究して4案を作つてくれ、そのうちの一つ、富山（泊）から有峰—
折立—太郎平（泊）—薬師沢—雲の平（2
泊・高天原往復）—三俣—双六—鏡平（泊）
—新穂高へ下つてくる5泊6日のコースが
決まった。出発は8月22日。

これに先立ち春日井君は7月に中国山西省
へ旅し、引き続き娘さんたち家族とハワイで
過ごし、炎暑のもとで高校野球を観戦、そし
て4～5日後にはこの山行きであつた。彼の
健康・前向きな行動力には感嘆するほかはな
かつた。

8月22日（月）富山駅前のビジネスホテル
に宿泊、空模様を気にしながらも地酒（小生
はお茶だったが）を酌んで明日以降の楽しみ
が掲げられていた。

を語り合つた。

翌23日（火）5時半、雨中をタクシーで折
立を目指す。増水した暴れ川、常願寺の奔流
が佐々堤（佐々成政の築堤）を駆け下るのを
見、富山地方鉄道立山線の道床が崩落してい
るのを横目にしながら進む。ところが、亀谷
温泉・有峰林道小見線の入り口で通行止めと
なつてしまつた。雨量が規定量を超えたから
だという。

やむなく14km余を歩く。道路を雨水が川の
ように流れ下る。トンネルは傘を持たなかつ
た春日井君には絶好の雨宿りの場だつた。雨
中の歩行4時間の後、貯水量2億トン、本水
系の発電量40万kwの有峰湖に着く。雨も上
がり満々と水をたたえた湖を眺める我々の眼
前に1頭のカモシカが静かに佇んでいた。春
日井君は急ぎカメラを取り出し10m程の距
離からそれを撮つた。

ただの1頭、仲間はないのだろうか？
やがて彼は樹間に消えていった。

「荷物軽量化の奥義を教える」。彼は「非常
食でも箱なんかみんな捨てて、中身だけにす
るんだ……それでも大先輩のYさんには到底
及ばないな。真似は出来ない」とのたもうた。
どうやら彼と小生の違いは靴下でも下着で
もその数と質にあるようだつた。春日井君は
薄手で高級品？ 数も少ない。（有峰ハウス

急遽宿泊を申し入れた「有峰ハウス」は昨
年9月に竣工したばかり、宿泊者は我々3
名のみだつた。対面に北陸電力の展示館があ
り、大正12年頃から始まつた電源開発の歴史
が掲げられていた。

春日井君が異常な興味を示した。なんと彼
は入社4～5年の頃、水力発電の巨大な導水
管を此処に納入した経験があり、有峰湖は彼
にとつて特別な場所であったのだ。

T Vで台風11号の動静を追い、荷物の軽重
談義となる。

「春日井君の荷物は軽くていいな」と言い出
したのに對して、彼は「恭ちゃんのは確かに
重いが石和田のとはそんなに変わらない
ぞ！」とやり返してきた。やがて恭ちゃんに
よる「装備の口頭点検」が始まつた。

「リビーティング」のようだ。そして身体も装備も省エネ・高効率型に出来ていると解する事にした。

24日（水）天気はまずまず、有峰から折立までは謂わば散策コースだ（交通止めが無ければ昨日タクシーでここまで来ていたのだが）。折立・太郎坂の入り口で春日井君は例によつて手洗いに寄つた。成果の程は聞かなかつたが……。

緑豊かな木々の合間や、雲の切れ間に薬師岳を望みながら太郎平小屋まで、意外なことに？ ガイド・ブックに近いペースで登れた。小屋への到着は昼少し前だつたろうか。

薬師沢小屋まで下るか？ の問いは下りの得意？ な春日井君のチヨイスに委ねられた。即決、彼を先頭にして黒部本流に向かつて下ることになった。

45分（サッカーのハーフ）を1ピッチのペースで進む。ところが2ピッチ目の休憩寸前で足弱な小生が木の根に蹴躓いてひどく転倒してしまつた。小屋まであと30～40分の所だつた。

佐薙君がリュック2つを背負つて小屋まで走り下り、春日井君は道路にへたり込んだ小生の傍らで回復を待つてくれた。小生が、今次山行にあたり女房が右胸につけてくれ

た“数珠”的話をすると四国八十八箇所巡りを始めた彼も「世の中には人智を超えた何かがあるなあ……」と巡礼の途次に経験した日本系カナダ人の不思議な出逢いや、朝一番で灯明を上げようと灯をもらつたローソクがランダード色のローソクを上げたあと何処を探しても見えなくなつていたことなどをしみじみと話してくれた。

30分ほどの後、小生の荷物を背負つた彼とぼつりぼつりと下り始め、出迎えに戻つてくれた佐薙兄とにはさまれて下つた。身体のバランス感覚が失せ踏ん張りが効かなくなつてしまつた小生は、途中で何回も転んだが、両君に助けられ、かろうじて小屋にたどり着いた。

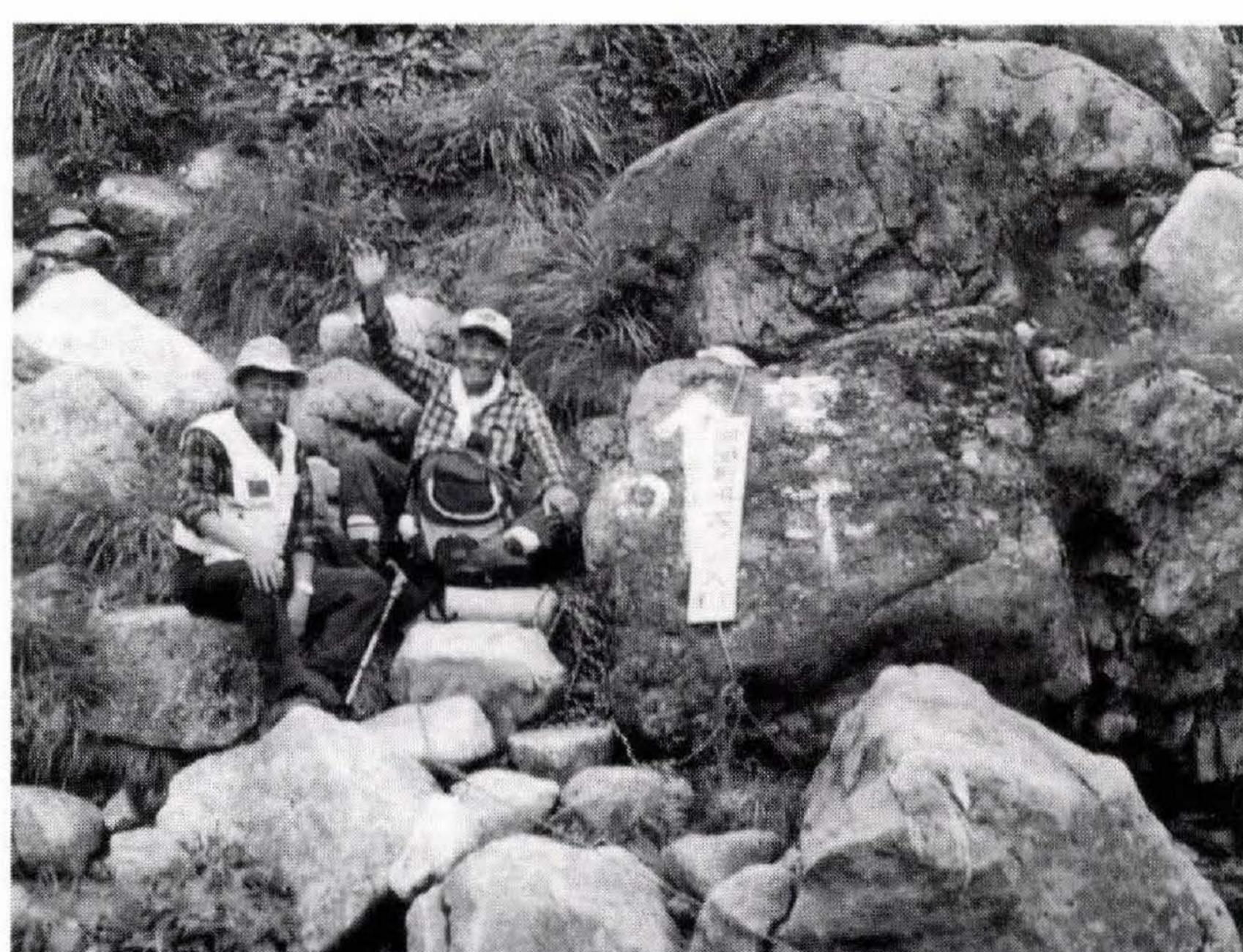
細いロープ1本だけが括りつけられた小屋の2階への昇降は実に恐ろしかつた。四角なペット・ボトルが転がり出しかねないほど傾斜した（雪の重みで歪んだという）小屋の2階で、翌朝までの回復を願い睡眠薬を服用した。

25日（木）生れたばかりの動物の子供が自分の足で立とうと懸命に奮闘する様子、人類が2本の足で歩行するようになった偉大なプロセスなどを改めて思い描きながら自分の

調子を確認した。前進は可能のようだ。

本流の吊橋（「此處で転落すれば黒部湖行き」とある）、鉄の梯子、そして飛び石を伝つ

2005年8月26日、黒部源流にて



て、かろうじて黒部を渡渉した。春日井君も極めて慎重だった。いよいよ「雲の平」への登りにかかる。

昨日のダメージから立ち直りきつていない小生は途中からサブ・ザック、佐薙、春日井両君にすっかり「おんぶ」してしまった。足取りは覚束なく「すまんなあ」「ありがとう」と繰り返す小生に春日井君は「俺が雲の平につき合わせたんだからなあ……」と答えてくれた。

薬師、黒部五郎、などを望見しながら漸く平坦なところに至り視界が開けたなと思ったら、そこが雲の平の一角「アラスカ庭園」だつた。「どうどう来たぞ春日井君！」西側に笠岳がくつきりと鋭角に天空を切り取り、東側には水晶、鶯羽、蓮華も雲間に見えた。

代わる代わる写真を撮つた。確かに「雲の平」へ來た事、背負つてゐるリュックの色から荷物を担いでもらつた隠しようもない証拠。「口止め料は高いぞ……」などと冗談を交わしながら奥日本庭園を通つて小屋に到着（確かに格好の材料を作つてしまつたことになるが、春日井君このファイルムはお蔵入りとしておこうか）。

時間に余裕があつたので佐薙君が「春日井！一人でも高天原へ下りるか？」と水を向けたが彼は首を立てには振らなかつた。

接近中の台風11号のせいか雲の動きは早く、小屋には水晶に行きたいという夫婦と中年の紳士1人が足止めされていた。

彼は大きな天眼鏡を片手に、小屋に置いてあつた資料に細かく目を通し、やがて雨具をつけて「辺りを回つてくる」と一人出かけた。高天原へ行けば通つたであろうコロナ観測所の辺りまで足を延ばしたらしく、小一時間で戻ってきた彼は実に満足そうだつた。

長い半日の暮れ方、西方、富山湾の辺りにほんのわずかの間だつたが茜色の空があり、今まさに沈まんとする夕陽が望めた。春日井君は「日本海側の高気圧が頑張り始めたんだ……、あの太陽、あつという間に沈んでしまうんだよな……」と小屋の小さな窓から西の空を見つめていた。

粗末な夕食だつたが彼は全てたいらげた。バテバテの小生は早々と2階の布団にもぐりこんだが佐薙・春日井両君は90何%とかいふ「気付け薬？」をちびりちびりとやりながら話し続けたようだつた。

その中で「石和田と早池峰に行く話しが残つてゐる……」と彼が言つていたのだけが何故か耳に届いて來た。

たようだつた。

日本庭園、○○庭園など、どこもみんな庭園と呼べそうな平坦な湿原・池塘を左右に見ながら進み、やがて黒部源流に向かつて下る。此處でまた先の転倒でダメージの残つていた小生がかなり派手にやつてしまつた。幸い立てたし、歩けた。奇跡的というほかになさそうだ。心配ばかりかける。

春日井君は後ろから「ステップが大きすぎる、だからバランスを崩すんだ！」とやさしくアドバイスをくれた。2回も救われた。今度やつたら「一巻の終わり」だ。ちょっとした段差でも「尻セード」で下る。

黒部源流の水音は次第に近くなり漸く川岸に着いた。先行した佐薙君は渡り終えて向こう岸で涼しい顔をしている。

「先ずは落ち着いて！ 黒部の岩魚に少々の餌をあげて……」と。ロープが1本、飛び石伝いに20メートルほどか。バランスを失つてしまつた小生は内心「ドボンになるかも？」と覚悟した。

春日井君はしきりに川下の辺りに浅瀬を探しているように見えた。この川を渡るのをためらつていたとすればそれは何だつたのか？ 佐薙君が向こうからすいすいと戻つてきて言わば手本を見せてくれ、先ず小生が渡り受けたが彼は首を立てには振らなかつた。

も問題なく渡渉した。ここから三俣山荘へはゆっくりと登つた。健脚の佐薙君は先行し、山荘の入り口で待つていた。

「どうする?」小生は「兎に角3日間、下界と連絡が取れていないので電話の出来る三俣山荘に寄りたい」と願い出た。春日井君は「出来ればもう一つ先に行けると良いんだけどな……」と飽くことなく前へ前へと急ぎがちな彼の本性?かららしい意思表明をした。

結局、バテ具合、天候の悪化などを考慮して三俣山荘に入ることになった(家人によると、23日夜、小生の転倒前日、千葉市一帯は激しい雷に見舞われ、我が家の近辺にも落雷、我が家の電気だけが消えてしまうという奇妙な現象があつたそうで、山で何かが起つているのでは……と不安だつたとのことだつた)。佐薙君と小生は2階食堂で「きつねうどん」を頬ばつたが春日井君はがらがらにすいていれる小屋の片隅で荷物の片付けもそこそこに布団をかぶつてしまつた。「佐薙君にテレホンカードをもらつて電話したら……」と話したが電話はしなかつたようだつた。

間もなく天候は悪化、「三俣どまりは正解だつたな!」と佐薙君と選択の正しかつたことを確認した。やがてずぶ濡れのグループ、10余名が着いたが、3人は小屋の一等地を占め、かなり離れ離れになつて身体を思い切り伸ばして夜を迎えた。「少し胃が痛い」と言うので、持参の「三共胃腸薬」と「ワカ末錠」をあげた。

五

春日井君は夕食も摂らなかつたし翌日の朝食も断つた(これは小屋に着いた時点での彼の選択)。何時も静かな眠りの彼は只管眠りからエネルギーを取りいれているように思われた。

27日(土)双六、鏡平を目指して発つ。蓮華・双六の頂上は通らず双六小屋までの「まき道コース」をとつた。食事を摂らなかつた春日井君の足取りは弱々しく感じられた。荷物は佐薙君が担いだ。腹痛を訴える場面が多くなつた。平坦な下りで「おおきじ」を撃ち、大分すつきりしたようだつた。

弓折の手前、「くろゆり平」からは佐薙君が携帶で『じろうさん』に連絡がとれたが、春日井君の息子さんへは数回トライしたが駄目だつた。「息子は2階にいるからなあ……」と言つていた。

溝状の下りを無難にこなして双六小屋に着いた彼はコップ1杯の牛乳を摂つた。何故かと確認した。やがてずぶ濡れのグループ、10余名が着いたが、3人は小屋の一等地を占め、かなり離れ離れになつて身体を思い切り伸ばして夜を迎えた。「少し胃が痛い」と言うので、持参の「三共胃腸薬」と「ワカ末錠」をあげた。

テイツクを握つて歩きはじめた。しかし、久々に雲が切れ、双六の池に映る景観は彼の眼には届かなかつたかも知れない。なだらかな起伏の道を進んだ後、弓折岳からは一挙に下る。我々のペースはゆっくりだつた。標準の倍近くつただつたろうか。やがて小屋の辺りからの甲高い声が聞えてき、池塘が点在する鏡平に着いた。

折から土曜日、小屋はごつた返していた。予約は正解、布団1枚に2人の混雑ぶりだ。佐薙君が事情を説明し、我々は部屋の片隅に2枚で3人のスペースを得た。彼は早速横になり痛みに耐えた。痛み止めを飲んだり、微熱がありそだといふのでおでこに『冷えピタ』を貼つたりした。(名古屋から来たといふ隣の中年夫妻が薬バッグを開けて、これはどうか、あれはどうかと気をくばつてくれた)

小屋での夕食はなんと8班に分かれて、言わば「呼び込み」で摂る有様、われわれは3班、春日井君は勿論摂れなかつたが、ぬるめに温めた牛乳を飲んだ。

仰向けに寝る事は無理、彼は右腹を下にしたほうが楽らしくその姿勢で苦痛に耐えた。小生の目の前に睡眠薬を飲んでも眠れない彼の背中があり、息遣いがじかに伝わってきた。どうしてやることも出来ない。背中をさすつてあげようとすると、それだけでも痛いと言う。

長い夜は続いた。夜中彼は手洗いに起きた。足取りはしつかりしているように感じられた。

六

28日(日) 午前5時、東の空に黒々と槍ヶ岳のシルエットが浮かんだ。大喰、中岳、南岳、北穂高、と望める。小屋の外ではこの景観に歓声があがる。山に入つて初めての好天のようだ。さて吾等は新穂高温泉経由で帰宅の予定だ。彼を励まし出かけることとする。

十分に時間を取り出発は一番後の組だった。「自分の身体は自分で下ろそう!」という山小屋の主(あるじ)に励まされ、山の男として下山の途についた。殆どが下り道、これが怖い。ゆっくりゆっくりと下る。標準の3~4倍位のペースであつたろうか。

今日のうちに帰宅できなくてもいい。せめて「わさび平」までたどり着ければ……。

彼の呼吸は荒くなり、ほんの少し進んでは休まざるを得なくなってきた。岩でも草の上でもゴロンと転がるしかない。行き交う登山者たちが気づかってくれる。ブドウ糖のフレークをくれ「元気を出して!」と励ましてくれる人、「水はどうか」と声をかけてくれる人……。実にあり難い。

下るにつれて、左前方には乗鞍岳、焼岳、西穂高岳など、右側には笠ヶ岳からの稜線が

青空にくつきりと見えていたが、我々にはとても景色を楽しむような気分はなかつたし、春日井君には更にそんな余裕などあるはずがなかつたろう。歩くより休む時間のほうが長くなってきた。それでも転倒もせず彼は必死で下り続けた。登つてくる人たちには「病人ですでの道が開けられません」と断り、下る人たちには「どうぞお先に」と追い越してもらうながら一步また一步と進んだ。

小池新道が左折して下降に転ずる2~300mほど手前で我々は身軽に登ってきた青年に声をかけられた。「私は山岳遭難救助隊の一員です。手伝いましょうか」と援助の手を差しのべてくれた。

我々は即座に「お願ひします」と申し出た。午前11時30分頃だった。

同氏は岐阜県警の新穂高温泉の駐在所に勤務しており、今日はプライベートで登つてきていた。志村さんという。早速、「遭難扱いでいいですね」と念を押した後、救助隊の本部に連絡を取り状況を説明、人員の応援を頼んだ。

4人になつた我々の背後に今度は赤いシャツを着たお腹のやや出た40歳?くらいの人達が追いついてきた。同氏は追い越そうともせず様子を察知して、すかさずバックアップしてくれた。この人は2年ほど前まで長野県で山岳ガイドをしたことのある須坂の住人で、

本職はシステム・エンジニア、矢張りプライベートでやつてきた途次であった。関さん

という。

言わばプロの2人に挟まれて春日井君の足取りには元気が出てきたように見えた。「励ましては歩き、そして休む」を何回か繰り返しているうちに、やや細身の眼鏡をかけた精悍な面持ちの人が駆け上がってきた。逢坂さんである。岐阜県警でも山岳救助を20数年もやり後輩を指導している。ベテラン中のベテランである。更に心強いサポートを得たのだ。逢坂さんが春日井君の後ろを歩く。

七

5分ほども歩いたろうか。逢坂さんが「どう」と決めた。ザックから背負う装備を取り出す。彼のからだが冷えないようにウインド・ブレーカーのようなものを着せ、頭にヘルメットをかぶせる。実に手際が良い。

「おとーさん何キロある?」

春日井君が「57キロ」と答える。

「よしよし、もう少しの辛抱だからね!」。

逢坂さんは春日井君を背負い、志村さんが紐で後ろからジッヘルする体制で下り始める。「担ぐんであと2人、民間の遭難救助協会から応援を頼みますよ」と断り、出動を要請する。

57キロの春日井君を背負つた救助隊の足

取りは実に速く、小生などはとてもついて行けない。「怪我のないようゆつくりと来てください」と言われその通りに行動することが最大の責務と思うばかりであった。

休憩を取つている救助隊をからうじて追いついた佐薙君と小生は秩父沢を少し下つた辺りで身軽に登つて来るいかにも地元で山慣れしたと思える2人に出会つた。

「3人の仲間かね?」と聞かれ、「お世話をかけます。どうぞよろしくお願ひします」と答え、感極まつて涙が溢れてしまつた。民間の遭難救助協会会長竹腰さんと第1班副班長の中畠さんだつた。

これだけの人たちの支援を得ればもう大丈夫だ、と心強く、「春日井君、頑張つてくれよ!」と祈り、願うばかりだつた。

こうして彼は、左俣谷の合流点付近まで入り込んだ林道の先端(一般の車は遙か手前で通行止め)ぎりぎりまで持ち込まれた車に収容され、ランプを回転させたパトカーの先導で「わさび平小屋」を過ぎ、新穂高温泉へ走つた。そこには救急車が待つており、彼は直ちに運び去られた。彼は30数キロ離れたこの地域では最大・最良の飛騨市立病院(飛騨市神岡町)を目指して運ばれて行つた筈である。

代表者として佐薙君が30分ほど事情聴取を受けた。その後我々はタクシーで後を追つ

た。途中で彼を搬送した救急車に出会つた。生憎今日は日曜日である。更に別のところへ転送される可能性があるかも知れないと気がしながら病院に着くと、既に彼が初期の診断を受け、酸素マスクや諸々の医療器具を身につけてベッドに横たわっていた。使い慣らした彼の登山靴はベッドの横に揃えられていた。

「家族へ連絡を取りたい」との病院側の要請に彼の自宅(息子さん)に電話をかけるが通じない。世田谷に居住しておられる長女美佳さん宅の電話番号を電話局に問合せせるが番号が見つからない。

彼は酸素マスクの下から「ミカは美しいに人偏に土2つだ」「主人の名はゴトーマサキ、勝という字に樹木の樹だ」「見つからない?!登録してないのかなあ」と呟く。連絡が取れないまま時間は経過する。

八

程なく働き盛りとおぼしき先生(病院長の黒木嘉人さん)から症状を記した書面を見せられ、状況は重篤である旨知らされた。家族・親族には未だ連絡は取れないが手術は急を要するという。「神の手にお任せするほかはない」と思った。

準備が出来次第手術にかかるという午後6時過ぎ、我々は一旦町のビジネス・ホテルに引

き上げ、山の汚れを洗い落とし、その後の経過を待つことにした。午後10時過ぎ、手術が終わった旨の連絡を受けた。先刻の黒木先生から手術の内容・所見などを聞いた。家族には連絡が取れ、状況は直接先生から説明され、家族は此方に向かつておられるということだつた。

専門的な表現・理解は無理だが、見せられた1枚の書面や先生の説明では「盲腸が破れて毒素が腹の中ばかりでなく身体の他の器官にもまわっている、いわゆる多臓器不全になつてゐる。盲腸には硬い糞がいっぱい詰まつていて。ICUで懸命の治療をしているが状況は重篤である」というものであつた。

11時少し前、我々は、「シリクロードを走破してきた体力・精神力で彼は必ず回復してくれる!」と信じ、それを祈りつつ病院をあとにした。神岡町を割つて流れる高原川の岸边に鷺が1羽、暗い水面を睨んでいた。

29日(月) 小生は自分の怪我の診断・治療のために下山させてもらうことにして、佐薙君はあと1日残つてくれるうことになった。午前8時半頃、病院へ出向く。先生・看護婦さんからいくらかでもその後の様子が聞けるかもしれない。病院には既に春日井君の家族が着いておられた。ICUで懸命の治療が続けら

れている。容態は変わらないようだ。彼は体力の消耗を防ぎ、回復を図るため眠らされているという。我々は3人のお子さん達に経過を説明した。悲痛・沈痛な思いだつた。

■平成17年9月12日■

二月会通信

30日（火）メモを作成、コピーをご家族にお渡しして佐薙君も下山した。

31日（水）昼過ぎ、訃報が届いた。

9月2日（金）通夜 世田谷区経堂 福昌寺

9月3日（土）告別式 同寺
「観岳院碧雲實榮居士」

かねてより 望みてはるけき 天界の 楽園に立ちて 君足早に去る
奥山に ともに過ごせし ときのこと 背負いて吾は 君の後行く

愚輩 石和田四郎 記

出席者 石井左右平、山崎擴、佐薙恭、蛭川孝夫、竹中彰、山本健一郎（文）

台風襲来とあつて集まりが悪く、来る筈の

本間くんも現れず、地下鉄の階段で足が轢つて動けなくなつたに違いない、下界ではレツドキックを持ち歩かないからとの結論になりました。蛭川くん、来月は小野くん、本間くんを必ず連れて来て下さい。

インプレットしておいて下さい。

春日井さんの訃報には驚くばかりです。日本山岳会の医療委員に聞いたところ「高齢者は症状が出るのが遅い」「抗生物質には良いものがある」などと教えられました。夏の北アルプスはあちこちの小屋に診療所があり抗生素を投与して貰える筈と調べてみたら、北アには18の診療所がありました。太郎平（日本医大）、三俣連華（岡山医大）、双六（富山医大）にもありましたが、開設期間はいずれも7月20日から8月20日でした。燕山荘と蝶の小屋があと数日長く、例外は11月まで開いている上高地です。私の友人に槍の小屋

の診療所（昔、鈴木羊三先生が詰めていました）に最終日に駆け込み、翌日下山する医療チームに付き添われ飛騨側に降ろされ、林道に入つて来た迎えの車に便乗入院した運の良い奴がいますが、数日の違いで診療所が閉鎖されていましたとは、不運が重なつたというしかありません。今まで山の診療所の開設期間など気にしたことがなかつたのですが、皆さん

の診療所（昔、鈴木羊三先生が詰めていました）に最終日に駆け込み、翌日下山する医療チームに付き添われ飛騨側に降ろされ、林道に入つて来た迎えの車に便乗入院した運の良い奴がいますが、数日の違いで診療所が閉鎖されていましたとは、不運が重なつたというしかありません。今まで山の診療所の開設期間など気にしたことがなかつたのですが、皆さん

佐薙さんから事後処理について出席者の意

見を求められました。皆さんのお意見はおよそ次の通りです。

1 何らかの形で丁重な対応をした方が良い。その費用は針葉樹会で負担する。

ろくに挨拶しなかつたらまたお世話になる羽目になり、冷や汗かいた団体があつた。そんなことで救助を手抜きする様な人達ではないが、同じ人が長年携わっているので古いことを覚えている。こんなことが二度あるとは思いたくないが、学生がお世話になることも有り得る。

2 具体的には会長名の礼状と報告、それにがしかの御札をしかるべき関係者が持参、その旅費も針葉樹会で負担する。御札は現金では失礼ではないか。

3 対象は平湯と新穂高温泉駐在の警察官2名、救助隊員2名、協力してくれた登山者1名の計5名。救助隊の方は費用の請求が来てからどの程度の御札をするか決めればよい。また登山者については礼状だけでよい、金品を送ると失礼ではないかとの意見あり。最終的には針葉樹会の幹事と関係者にお任せします。

●山行報告

石井 高尾山に2回登った
山崎 大山、箱根など

佐藤 8／4 平標小屋、5日肩の小屋に泊まり蓬峠から土樽に降りた。特筆すべきは細田官房長官の様な顔の肩の小屋の管理人、朝食を客の希望に合わせ朝3時半に起きて、温かい朝食を出してくれたので感激。

蛭川 7／20～25 有峰から黒部五郎に登り、三俣連華小屋から鷲羽を往復、鏡平へ。7／29～8／4 斜里岳と雌阿寒 8／20 飯盛山 相変わらず頑張っています。

竹中 白根三山 8／4 白根御池小屋、／5 農鳥小屋、／6 西山温泉と学生の時に行き損ねた白根三山へ本間くんと同期生で。皆さんレッドキックを本間キックと呼ぶ様になつた由

●山行予定

蛭川 9／14 から百名山の最後に残した水晶岳に奥さんと行く予定。その後は自選のドリームリストに挑戦、白砂山、鳥甲山などに行きたいとか。おめでとう

小野くんが10／14 から2週間の予定で本州の山に来る予定。10／17 のこの会に出て、10／20 から10／29 にかけて会津駒、苗場山、巻機山、蛭ヶ岳などに登る予定 上原（メール参加） 9／22～25 までの鹿島槍を膝関節の損傷により中止しました。関節の痛い人にはヒアルロン酸がきく

プラブーツ

このところ皆さんの間でプラブーツの破損が話題になっている様ですが、これは前世紀に起きた事件、針葉樹会は遅れています。確かに94～95年頃スキー靴がバラバラになるという事件が多発しました。滑っているうちに突然スキーが外れたと思ったら靴がなくなりスキーに靴底だけが残っていたとか、その破壊が左右同時に起きたなどという話を聞きました。

初めてこの破壊はある特定の銘柄に集中、あの靴は駄目という評判が立ちましたが、やがてどの銘柄でも、また登山靴でも発生する様になりました。本来熱硬化性のポリウレタンを、量産するために熱可塑性を持たせ型に入れて加熱して成型したために破損事故が起きたと聞きました。

日本山岳会や他の登山団体からの抗議を受けたメーカーは合成樹脂は経年変化が避けられず、5年以上の保証は出来ないと回答していました。破損の原因は可塑性ポリウレタンのエステル結合の加水分解とされています。要は別の樹脂ならよい訳ですが、ナイロンは

そこで、その注射（生科学工業社製アルツ）を打つてもらいました。詳しいことは、次回の三月会でお話しできればと思います。

紫外線に弱く、塩ビは強度不足、昔エポキシ樹脂でスキー靴を作っていたところもコストと加工性の問題で止めてしまつたくらいですからなかなか代替素材はない様です。

しかし皮肉にもこの問題発生後各メーカーともにか工夫している様で、市販スキー靴の寿命は延びてゐる様な気がしますし、破損例も減りましたが5年のバーそのままで。

その3年ほど後に起きたのが軽登山靴の靴底の剥離です。靴と靴底の間に入っているウレタンフォームのクッション材が駄目になります。私も1足この手の靴を持つていて、溪流シューズに履き替えて背負わなければならない山に履いていきます。何年か前、神威岳で靴底の剥離を経験しました。テープを巻いて急場を凌ぎ、神威山荘に戻つてからウレタンを剥ぎ取りゼリー状のアロンアルファで修理しました。その後2つばかり山に登つて帰宅しましたが、水漏れもなく使用に耐え、今でも使えます。瞬間接着剤は何時もザックに入っていますが役に立ちます。

液状のものは浸み込んでしまうので、ゼリー状のものが使いやすくお勧めです。また日曜大工の店で手に入れた適当な太さの銅線も加工しやすいので便利です。ウレタン樹脂は靴だけではなく山スキーのビンディング、ストックのリングなどにも使われています。補修用

の小物は必携です。

■平成17年10月17日■

出席者 石井左右平、山崎擴、佐薙恭、中川滋夫、三井博、高橋信成、蛭川隆夫、竹中彰、本間浩、小野肇、山本健一郎（文）

先月は開催日を第2週にしたため、人数が少なかつた様ですが、今月は札幌から小野君が現れ、来年の北海道行きが話題になるなど盛況でした。

●懇親山行

11月12日、有明山に登りアダージオ泊の

計画に、久々に倉知君も参加するというビッグニュースが入りました。川名さんも参加です。倉知君と久し振りに登ると張り切る人と、川名さんに付き合いたいが倉知君にしごかれそうで心配という両派に分かれました。

大先輩方は十文字峠から甲武信、金峰、編笠山と青年小屋のどちらのプランをこなしてアダージオ入りの予定です。私は先年一人で有明山に登つてきたので、こちらに参加する

岩魚の塩焼きとそばを楽しんだ。

三井 8月11日、念願の幌尻岳に登つた。9月毛勝に行つたが雨と体調不良で敗退。先週苗場と巻機に登つた。（三井君が途中リタイヤーとは珍しい）

月末同期のハイキング会で相模湖から城山、小仏峠。後は池口山、黒法師、筈に登

●山行報告と計画

石井・山崎 中仙道歩き、先日塩尻峠を越え洗馬まで、京都にたどり着くのはいつ？佐薙 昨日、春日井さんの四十九日法要を終え、彼の魂は三途の川を渡つた。服喪期間を終えたので追悼登山を計画する。関係方面には会長名で礼状と粗品送付ずみ。

高橋 8月早月尾根から剣に登り、剣沢から仙人池、樺平と歩いた。チンネは4ルートを登つたが、今見ると登れそうにない。左稜線の積雪期初登の中川バーテイに改めて敬意を表する。（バツトレース第三尾根を高橋君と登つた藤島敏男さんはあの時70歳、まだ若い君は頑張りなさい）

懇親山行に参加したいが、有明山に登つてから蓼科移動は大変ではないか。

中川 8月初南アルプス、櫛島、千枚小屋、荒川小屋、赤石小屋とのんびり泊まりを重ね会社の4人の仲間で楽しく歩いた。今月初、同じ仲間で雨の奥穂、嘉門次小屋に泊まり、岩魚の塩焼きとそばを楽しんだ。

三井 8月11日、念願の幌尻岳に登つた。9月毛勝に行つたが雨と体調不良で敗退。先週苗場と巻機に登つた。（三井君が途中リタイヤーとは珍しい）

りたい。来年5月会津朝日、丸山など計画する。

本間 竹中君と8月白根三山 9月17日
玄倉から檜洞に登り、神ノ川に降りて鐘撞山から大越路（鐘撞山に登山道があるとは知らなかつた、俺は登つていなかつた）10月初頭に登り烏尾尾根を降りた。

三国峠から菰釣山あるいはその逆を歩いたい。白毛門から蓬峠、谷川岳も予定。

小野 8月石狩川から石狩岳（沼の原の方から？）、沙流岳（日勝峠から林道利用、沙流川から）、ベンケヌーシ（チロ口岳のそばの1750米）、ピリベツ（1602）、西クマネシリ（1635）位までは知つてゐるが、然別湖の南の東西ヌプカウシなんて知らないよ。10月初紅葉と新雪の赤岳と沼の原山（精力的に北海道の山に登つていて、山もルートも凝つています）

これから苗場山、巻機山、上州武尊、丹沢に登つて札幌に帰る。（ついでに東北の山を登りながら青森まで歩けば良いのに）

蛭川 湯股から竹村新道を登り野口五郎泊。翌9月16日晴天に恵まれ百名山の最後に残つた水晶岳に夫人と登つた。（おめでとうございます）

来年7月初 小野君とニペソツかクワウン

ナイ遡行を計画することになりました。
12月誰かが小樽山に行こうと言つていた記憶があるが、誰だつたか忘れてしまつた。

小野君の歓迎会が25日あります。皆さん蛭川幹事まで。来年ニペソツとかクワウンナイに行きたい人は来ないと外されますよ。

中川君 富士桜CC 16番ホールでホールインワン達成。保険に入つていなかつたので、

今後に備え入つた由。（山岳保険が先だよ）

小島君 帰国、住所は前と同じ二俣川、電話045-363-7465 また山に行こう

イザベラ・バードの『中国奥地紀行』を読んでいて、『ロツキーサル踏破行』という本もある筈と探し始めた。この頃が悪くなつて暗い本棚が苦手になつた。雨の日や夜は青色ダイオードのヘッドランプをつけて本を探すのがなかなか見つからない。あれは文庫本だと気がついて探し直したら、『ルバイヤット』と『共産党宣言』に挟まれているのを見た。この取り合わせは絶妙である。おかげにその隣はフレーバーの『金枝篇』があり、苦笑いせざるを得なかつた。確かに『共産党宣言』の出だしは「一つの妖怪がヨーロッパ中を吹き荒れている」ではないかと思ひながら棚に戻したとき、「ルバイヤット」の著者オマール・カイヤムには確かにサン・イ・サバーと

いう学友がいて、「山の老人」として知られてゐるのを思い出した。

この「山の老人」の事はマルコ・ポーロの『東方見聞録』でも読んだ記憶があるが、これが蓼科においてあるので確認出来ない。うろ覚えだがこの人はテヘランのそばのアラムトの城の中に庭園を作り、周りの4つの堀に酒とミルクと蜂蜜と水を満たし、美女を集め勇気のある若者をこの地上の天国に招き入れた。そして必要に応じ若者に薬を与え、王様や貴族の暗殺を命じ、死ねば本当の天国に行けると言ひ聞かせたそうである。この薬はHASHISHINつまり麻薬であり、ASSASSIN（暗殺）の語源になつたらしい。

確かにこの老人の城跡は20世紀になつて発掘調査が行われたと記憶している。興味のある方はまず東洋文庫の『東方見聞録』を読んで下さい。この文庫にはイザベラ・バードの『日本奥地紀行』、三蔵法師の『大唐西域記』など面白い本が集められており、読む本に事欠いたら東洋文庫に当たれば必ず何かが見つかること請け合いである。伊藤宗看ほかの名作詰将棋集『詰むや詰まざるや』もあり、伊藤看寿の煙詰め、（盤上の駒が次第に消え、玉と攻め方の駒二枚が残る詰め上がりまで百十七手の名作）とか六百十一手詰の寿という作品が載つてゐるが、因みに一局の将棋は八十手か

ら百二十手くらいなので、この詰将棋の難解さが想像出来る。また詰将棋は必ず奇数手で詰るものである。また囲碁の『爛柯堂棋話』も一読に値する。囲碁の別名に爛柯、烏鵲、手談などの言葉があり、爛柯とは昔中国の木樵が山中で仙人が碁を打つてゐるのを見つけ、見とれているうちに長い年月が過ぎ、気が付いたらそばに置いた斧の柄（柯）が腐（欄）つていたという故事に由来する。

この頃は東洋文庫を置いていない、本屋とも言えない本屋が増え不便である。銀座の子会社にいた頃5丁目に「くまざわ」という大きい本屋がオープンした。早速行つて店員に東洋文庫はどの辺にあるかと聞いたら、東洋文庫がどんなものか知らないらしく文庫本のコーナーに走つて行つた。これは駄目だと思つていたら案の定「東洋文庫という文庫はございません」と言われた。折角来たのだからと一通り店内を歩いたら東洋文庫があつたが中途半端な品揃えで役に立ちそうにない。ところが何と別の場所にも東洋文庫があり、合わせると一通り揃つていた。面白いのでいつも気が付くかと昼休み毎に偵察していたら、3か月くらいして一か所にまとめられてしまった。誰かお節介な奴が店員に注意して、私の楽しみを台無しにしてくれた様である。

この頃東洋文庫の棚の前に立つとまだ読ん

でいない本の多さに気が滅入る。これではなかなか死ぬ訳にいかないし、早くこの欄の後継者を見つけなくてはなるまい。万巻の書といふけれど今までに何冊くらいの本を読んだのだろう。読み始めて60年、年に百冊としてたつたの六千冊、頑張つて年に二百冊読んだとして一万二千冊しか読めないのか、でも年に二百冊のペースでは読んでいない様だ、人生は短い。

■平成17年11月21日■

出席者 石井左右平、山崎擴、佐薙恭、有賀盈、三井博、高橋信成、蛭川隆夫、竹中彰、本間浩、山本健一郎（文）

10名が集まり賑やかでしたが、小島君、金子君は残念にも現れず、現役は忙しいようです。（小島くんはどこかに出かけていたらしく、都合のついた時に来ればいいよ）

またこの前のワインの記事を読んだ有賀君が Robin Bradley という人の Australian and New Zealand Wine Vintages という本を貸してくれました。2年毎に出ていて、11版を重ねているのに私は知りませんでした。

14階のバーは予約が出来るようになります。12月19日は予約済です。何人かが6時前に着席するのが条件なので皆さんお早目に。

慶応の山岳部創立90周年記念登山隊が9月下旬に、チベットのカ・ル・ション峰6647mの登頂に成功しました。7名の隊員のうち6名は昭和30年代の卒業生、一番若い隊員が43年卒です。こういう企画を立てるグループは皆T中君のところに相談に来るのに、本家

本元が何もないのは勿体ない限りです。うちの会長も脳味噌からアルコール分を抜いて、こういう前向きの企画を立てなさいと言いたくなります。

今月初旬、関西の中西君から葉書がきました。懇親山行は来られないが元気な様で、5月から6月にかけて地中海東部を旅行、エルバまで行つたとか。確かにナポレオンが流れていた筈、きっとナポレオン気分を味わつたことでしょう。また先月の東洋文庫の記事を読んで早速書店に行つたと几帳面な中西君は知られてくれました。

は山陽道？懇親山行の時は、12日に武川の山高神代桜とサントリーの工場見学、13日は西天狗往復の後アダージオにもう一泊。

佐薙 10月に丹沢表尾根、11月初笹子から滝子山に登り初狩に降りた。懇親山行は石井、山崎先輩に同行。

有賀 小野君に付き合い苗場山。彼は北海道百名山、チロロ、駒ヶ岳（登山禁止）ペテガリの3つを残すのみ。

三井 相模湖から小仏峠、クラス会の下見

●懇親山行

有明山は中房から倉知、三井、高橋、西牟田、金子、兵藤、佐藤活の7名が登り、松川からの前神、近藤、神野、川名の精銳4名がどうしたことか早々と止めてしまった由。まあ来年、倉知君も行きなさい。

高橋 懇親山行翌13日は若手の蓼科山に対し、高橋、竹中のちゅうトルと紅一点川名組は木曾駒から宝剣へ。木曾駒組は川名さんにしごかれ、こわごわ雪と岩のミックス宝剣を縦走したとか。茅野のICでアイゼンを買った人も活用できたそうです。

本間 小野君の丹沢行に同行、ヤビツから尊仏山荘泊、翌日蛭ヶ岳を越えて青根に降りる。夜10時に大倉を出て午前2時に着いた女性の泊まり客2人がいた。11月は天城山

にゴルフ場から往復、後は五百円札の雁ヶ腹摺山から姥子山（あの頂上往復したの）。

19日 曲岳、黒富士に登り瑞牆山荘泊、20日蛭川は小川山、本間は瑞牆山に登った。

蛭川 10月は、20日小野君にしごかれて武尊岳、その後小赤沢から苗場山。11月4日には別所温泉近くの夫神岳、池内紀の山渓から出ている本で読んだ山。

山本 裳毛からヤビツに登つたが、雨で三の塔から大倉に降りた。

●山行予定

石井・山崎・佐薙 忘年登山、小幡山。一応15～16日の予定ですが、焼山林道が閉鎖されるとの情報もあり、佐薙リーダーと蛭川幹事が協議中。

12月の三月会（19日）で来年の希望をまとめる予定ですが、もう5月の北アルプス、6月の駒と中の岳、9月のニペソツなどの計画が具体化しつつあります。ニペソツは蛭川君の計画で初日、千歳から幌加温泉泊、2日目ニペソツ往復糠平温泉泊、3日目解散、東大雪での延長戦あり、湯あたりが心配です。

また小野君が上越の山スキーに来たいと連絡してきました。場所柄1～2月は厳しいので、3月末か4月初に、蛭川君にお願い

して湯沢のマンションをベースにどこかに行きませんか。苗場は神楽峰より上はピックルとアイゼンの世界、平標・万太郎か巻機はどうですか。兵藤君、近藤君、川名さん宜しく。

■平成17年12月19日■

出席者 石井右左平、山崎擴、佐薙恭、三井博、高橋信成、蛭川隆夫、竹中彰、本間浩、山本健一郎（文）

●山行報告

石井・山崎 中仙道を木曾福島から南木曾、福島～上松間はバス、バスが早いのを実感

佐薙 12／8丹沢鍋割山稜、大倉で一杯。三井 12／8小仏峠から城山、クラス会32名でハイキング

本間 11／24箱根鷹巣山から湯坂道

12／3鎌倉ハイキング 明月院から覚円寺

12／11建長寺から瑞泉寺

12／15～16浜石岳、白鳥山、十枚山（石井、山崎、佐薙、有賀、蛭川、本間）、山本は浜石岳のみ

12／17丹沢鍋割山稜

蛭川 本間君との鎌倉、浜石など

山本 大山三峰に初めて行つた

燧、会津駒、ニペソツ（本間・小野他、9
月初）

●山行計画

昨年の扇山のような日帰りの山行を2月18日にやろうということになりました。詳細来月のこの会と新年会で発表します。

例年通り来年登りたい山のアンケートを実施しました。持ち帰つて調べたら石井さん、山崎さんの分がありません。お出しにならなかつたのでしょうか。

（冬から春にかけて／残雪期／夏の山／秋以降の山、の順）

佐藤 天城縦走／北アか南／新穂高温泉から黒部五郎経由折立（春日井氏追悼）、越百から極楽平（晚夏から初秋）／未定／その他 富士山（夏と冬を避け）、キリマンジャロ 三井 萩釣山から山伏峠、宇都宮アルプス、川乗山・蕎麦粒山／天祖山・甲武信、後方 羊蹄山、池口岳／越後駒から中の岳、悪沢から赤石／鳳凰三山、熊野古道、ニペソツ

高橋 6月中国の山（嵩山と華山）／白馬（鎗温泉か祖母谷温泉）、北海道、小野君と

蛭川 雨ヶ岳（本間・竹中）後は富士山に登りたい／長九郎山（5月、本間）／至仏、

本間 1月塔の岳、清八山、赤鞍、雨ヶ岳、鹿留／山神峠から蛭、弘法山、那須／塩見、前出至仏ほか／男体・奥白根、奥秩父・菰釣・節刀、臼ヶ岳から大室山

皆さん長九郎山に行くようですが、昔銀行

の忘年山行に望月さんが面白い名の山があるから行こうというので、長九郎山の南の婆娑羅山に登り大沢温泉で入浴、翌日は笠蓋山に登りました。岡垣くんも一緒でしたが、笠蓋山はひどい藪山で眺めもなく、みんな望月さんの物好きも度が過ぎると文句ばかりでした。私は前日、和光でしゃれた色合いのウールのシャツをボーナスをはたいて買ったのですが、茨にひつかれてぼろぼろになり、一日で駄目になりました。皆さんついでにこの二つも登られるとよいでしょう。

竹中 近郊の雪山、スキーの復活／越後駒と中の岳、鹿島白馬辺り／至仏と燧（前出）、南ア

山本 人形山、中の岳／猿が馬場／ペテガリ／大峰・大台、御神楽

●「月見の宴」

参加者は、石原、三井、高橋、西牟田、金子、井草、前神、川名、宗像、山田、鳥本、竹中の各OBと現役のコースチャ君でした。

例年に較べて古いOBの顔が少なく稍々寂

しい感じでしたが、鳥本、コースチャ君の買出しとOBの持ち寄った各種の酒、肴でおでん、キムチ鍋を囲み、月は見えませんでしたが盛大な酒盛りとなりました。宴と共に石原

さん得意のロシア民謡や安曇節などの歌も飛び出し、嘗ての山行時に沈殿の時に覚えた「山で唄う歌」のオンパレードとなりました。その際に若手のOBからは、一橋山男の歌をはじめ安曇節や中野小唄、野沢小唄、他大学の部歌などを集大成してはどうかとの提案なども出ていました。何れこのH.U.H.A.C上で各自の覚えている安曇節の歌詞などを投稿して頂けたらと思います。

準備して頂いた、鳥本君、コースチャ君、開催案内の連絡をしてくれた山田君ご苦労様でした。

（竹中 記）

● 懇親山行

11月12日（土）、秋の懇親山行にお馴染み蓼科アダージオに集合し、前日に中島寛さんの追悼集中登山に参加したメンバーと直接アダージオに向かつたメンバーが一同に会し総勢12名（含むアダージオ亭主松尾君）が賑やかにテーブルを囲みました。

持ち込んだ酒量は、森伊藏、ハイランドモルトusuquebach、riojaワインなど3本、日本酒小笹竹鶴、菊水ふなくち2本、ビールなど——こんなに飲めるかと思つたのも杞憂で、23時頃には完飲！ 松尾夫人お得意の料理の数々と各自の近況報告を肴に宴は楽しく進み、先日の月見の宴でも話題になつた歌集編纂をテーマにシニア層には懐かしい、若手には初めての歌の数々も出てお開きとなりました。

11月13日、本日は絶好の登山日和の中、

蓼科山、西天狗、木曽駒へと分散登山となりました。小生は高橋、川名さんと共に木曽駒へ向かうべく駒ヶ根のロープウェーで9時過ぎに千畳敷に上がり（既に標高2600m余）、可なりの強風の中、アイゼンでウインドクラスト、氷化した雪面を踏みしめ中岳・木曽駒ヶ岳（11時）に。残念ながら中央アルプスは空木岳方面まで見えましたが、御嶽山、

乗鞍岳、南アルプスも霞んでいまひとつでした。それでも40年余前の冬合宿で臼井リードの下で、木曽駒から縦走をしたこと等を若かつたあの頃を懐かしく思い起こしました。乗越淨土に戻った所で、宝剣岳まで行くかどうか協議、いまひとつ乗り気でない初老2名に若手OGが発破をかけ、取り敢えず宝剣頂上を目指す。鎖場をよじ登り、何とか頂上に着き、トレースがあるのを確認し、極楽平経由でロープウェー駅へ降りることに。登り以上に鎖場の連続する中、何とか遭難碑の立つ広い雪稜にたどり着き緊張もほぐれる。13時半にはロープウェー駅に着き、バスに乗り継ぎ駐車場へ。そこで近くのこぶしの湯に向かい、16時には各マイカーで帰途につく。例によつて大月近くから混みだし、小仏トンネルでは抜けるのに2時間以上の表示が出たが、20時に八王子ICへ、自宅帰着は20時40分でした。

懇親山行に参加の皆さん色々とご協力有難うございました。また、何時ものことながら、アダージオの松尾ご夫妻には夜遅くまで、また朝早くから色々とお気遣い頂き有難うございました。以上取り敢えずご報告いたします。

（竹中 記）

編集後記

■ 106号の発行が新年会に遅れただけでなく3月にまで遅れこんでしまい、ご心配をおかけしました。編集段階で風邪と多忙のダブルパンチを喰らったのが原因です。次号からは遅れないよう万全を期すつもりです。

今号の表紙は中村さんが昨秋、外人としては70年ぶり2人目として入ったチベットの秘境の山タバシリです。会報の表紙をこういう貴重な写真で飾るのは、編集人として光栄の至りです。本文の紀行文とともにお楽しみいただけます。

北海道五十名山は、北海道にほれ込んだ小野さんならではの深い味わいがあり、楽しく読みました。同時にこれから北海道に関心のある向きには貴重な情報源となるでしょう。

藤原さんの北鎌尾根、読んでいるうちに大学3年の秋に登ったことが懐かしく思い出され、興奮しました。105号の山田さんの「商大ルート」で同様に青春時代を懐かしんだ会員の方も多かったのではないかでしょうか。

(有賀)

針葉樹会報（復刊／創刊／百号）の合本が、如水会館の5階に移転した図書室で閲覧できるようになっています。みなさんどうぞご利用ください。

■ 須山修平さんより『ヒマラヤの高峰』第一巻をお持ちの方にお知らせ、という手紙をいただきました。

主旨は「第一巻のブロードピークの項で、再度頂上に向かつたのはフリツツ・ヴィンターシュテラーではなく、クルト・ディームベルガーだった（この項は山岳文化第3号の西本武志氏の文に基づいています）」というものです。

■ 三月会通信の「お楽しみコーナー」山本健一郎さんの随筆ですが、ページ数の関係で11月と12月の分を割愛させていただきました。あらためて別の機会に掲載いたしますのでどうかご了承ください。（井草）

■ 風邪をひいて会報が遅れましたことをお詫びします。9度近い熱が3日ほど下がらず（インフルエンザは陰性）子どもの頃以来の体験でした。みなさまもお大事になさってください。ところで先日フットサルを初めてやりました。平河町のビルの屋上で、土曜夜、成人男性に加えて成人女性（4人）と子ども（小学3、4年生3人）の混成で、総勢20人ほど。球技は苦手と思っていましたが、少しばかり闘志も芽生え、小さな子どもと過ごす時間も楽しいものでした（シューートも一発決めましたし！）。技術は全然ダメですが、足腰のねばりと持久力は我ながら「なかなか」と思えたのは、もちろん山登りのおかげです。

(川名)

【訂正】105号25頁の写真。右側の人物は三股ではなく中島寛でした。お詫びして訂正します。